

# 幼 兒 教 育



第 十 四 卷      十 月 號      第 十 號

東 京 女 子 高 等 師 範 學 校 內

日 本 幼 稚 園 協 會

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編 (再版)

# 觀察の實際

菊判 一三〇頁  
定價 金壹圓  
送料 東京 金六錢  
市内 金九錢  
其他 金九錢

○觀察の實際については何か参考したいといふ御希望は皆様から常に同ふ所、本書はその爲に最も適切親切なる書である。

日本幼稚園協會編

幼稚園談話集 (四版)

東京女子高等師範學校附屬幼稚園編

系統的保育案の實際 (四版)

幼児の教育 (月刊)

菊版三五〇頁 定價金壹圓五拾錢  
送料 市内 金六錢  
地方 北海道・臺灣 金拾五錢  
樺太・朝鮮・滿洲

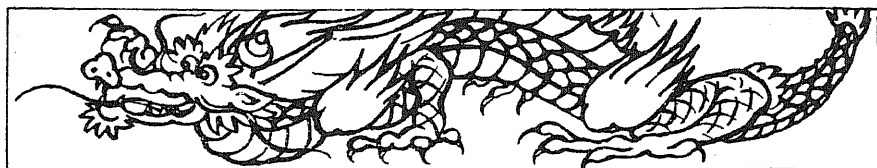
定價 金壹圓  
送料 金六錢

一ヶ月 金參拾五錢 送料金一錢  
一ヶ月 金四圓貳拾錢 送料共

六六二七一 東京 振替

日本幼稚園協會

東京女子高等師範學校附屬幼稚園



第十四卷 幼 兒 教 育 第 十 號

—(次 目)—

扉

動員せられた幼稚園

倉橋惣三(一)

建國童話(二)

久留島武彦(四)

毎月の保育問題

上澤謙二(九)

十月の保育

及川ふみ(二五)

フレーベル賞入選童話童謡

紅ちやん朝顔

福山隆(二)

てんこう蟲

清水あさ(三)

ピアノお道

川口幸子(三)

お窓の雨

伊藤逸子(四)

幼児の母

(三)

ハイデイ——ヨハンナ・スピリ原作

津田芳雄譯(元)

國民學校と國民幼稚園(二)

倉橋惣三(四)

倉橋惣三編 (新刊)

# 新體幼稚園唱歌

四六倍判  
定價(送料共)  
金七拾錢

目 日本の旗日の丸の旗  
次 道ぶしん  
倉橋惣三 作詞  
小松耕輔 作曲  
井上武士 作曲

いうびんやさん 倉橋惣三 作詞  
弘田龍太郎 作曲  
渡し場の船頭さん 倉橋惣三 作詞  
中山晋平 作曲  
火消しのちぢさん 倉橋惣三 作詞  
小林つや江 作曲

日本幼稚園協會編 (新刊)

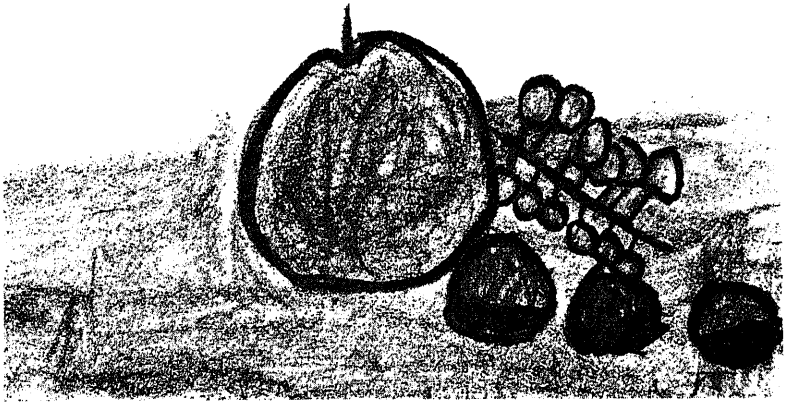
# 幼稚園新唱歌

四六倍判  
定價(送料共)  
金五拾錢

目めだか  
次 雨  
小松耕輔 作詞  
山崎きよ 作曲  
杉山米子 作曲  
小松耕輔 作曲

ほたる  
ふしん場  
青山綾子 作詞  
小松耕輔 作曲  
氏原銀 作詞  
小松耕輔 作曲

〇この二つの新刊幼稚園唱歌集は、幼稚園の爲に新しい歌曲を求めて居らるゝ方々に必ずや充分歓迎せらるゝことを期待してゐる。



畫伯は、くだものがお好きである。その好物を前にして描いてゐる時ほど、氣のはいる時はない。ごらんなさい。すつかり打ち込んで描いてゐる。一派の人々は之れを寫生とよぶだらうが、それどころか、畫伯は、つばを呑み込みながら描いてゐる。たゞる實感を假想して。が、遂にたべられない。天才は苦しい。

(倉橋生)

# 動員せられた幼稚園

倉 橋 惣 三

今日は國を擧げての總動員である。幼稚園も亦當然動員せられざるにない。幼稚園の動員とはどういふことであらうか。幼稚園を閉鎖して工場にすることにない。保育を休止して保母を機械の前に立たせることではない。時にそこまで逼迫した動員も世に無いではなからう。少くも、今日我國に於ける意味はそうではない。新體制はいふ。各々その職場に於て。幼稚園は愈々幼稚園として、保母は益々保母として、國の急務に動員せられるのである。

幼稚園は家庭教育を補ふことを、平生からの本務とする。その家庭が、平時とは異つて忙しい今日である。母が忙しいのである。平時に於ては、忙しい母が忙しかつた。その、謂はゞ個人的理由による母の多忙に、幼稚園が手傳ひをするのであつた。今日の母の忙しさは、それと少しく、否大に、意味が異つてゐる。國のために、直接に、母が忙しいのである。男は外に出て戦ふてゐる。銃を執つて國を護つてゐる。銃後は婦人の手に托せられざるを得ない。婦人自ら進んで之れを擔當せざるを得ない。それは、男の手の不足を、已むなく補ふといつた消極的のこゝではない。婦人が引受けて働くことによつて、男をして後顧——國のこゝも、家のこゝも——の憂ひなく存分に戦はしめ、働かしめるための、積極的活動である。

國の立て前としても、婦人には家を守つて貰ひたい。子女の保育に専念して貰ひたい。それが、何よりの御奉公として、母に委任せられてゐることである。しかし、今日は、平時の如く、それをのみ要求し、それにのみ専らであらしめることが、國の大きな必要のために出来難い。召される男の後をうけて、母も、直接に國のこゝに召されるのである。

農村の母の手が今日、こんなに忙しさを劇増してゐることであらう。都市の母達も亦、家庭にあり得る時間が如何に、外の公用に振りむけられてゐることであらう。又、假りに直接公用といはれないまでも、國を擧げての繁忙は、家の職業

そのものをも、止まるどころなく忙しくさせてゐるのである。

この時、その忙しい母を助けて、兎に角も何より大事な幼児の保育に、事を缺かしめず、事を誤らしめないやうにするのが、今日の幼稚園の、平時以上の責務である。近年幼稚園の入園志望幼児は、著しく増加してゐる。これは、各幼稚園がごこも充員してゐるごこに於て明かである。その理由として、幼児期保育の重要さが、廣く一般に徹底した爲であるごこも、是非擧げなければならぬ。しかも、今こゝで考へてゐる母の多忙が、その大きな理由の一つであるごこを思はせる。更にこれを、もう一つさかのぼつて言へば、國の忙しい爲に他ならぬ。

この母の多忙が原因となつて、乳幼児の上に、いろ／＼憂ふべき問題が起る。その著しく外に見えるのが保健問題である。そこで、之れに對して、國家は種々の對策を立てゝゐる。社會保健婦の普及もそれである。常設また季節的保育所の増設もそれである。いづれも極めて必要である。しかし、母の多忙が我子に及ぼす影響は、促進の上だけではない。寧ろもつこ深いごころ、もつこ機微の點で、性情の上に及ぼすごころが多い。それを吾々は最も憂ふのであるが、吾々以上に憂へてゐるのは、母その人であるに相違ない。勿論一般の母が、それを理論的に考へてゐる譯ではなく、意識のしかたさへも、極めて漠然たるものであらう。が、母の本能でそれを案じてゐる。今まで餘り氣をこめなかつた幼稚園さいふもののにその絶好の補助施設として、進んで入園せしめようとするのは、即ち此の心もちのあらはれでない誰れがいへよう。そこには、保健上の委託が勿論ある。しかしそれだけでは止まらない。母がわが子に希ふものは、もつこ深いごころにある。少しでも心ある母は、わが子を健康にして貰ふだけでは、決して満足し盡すものではない。幼稚園を求むる心そこにあるのである。

○

この今日の事態に即して、幼稚園がその責務を、充分自ら知らなければならぬごこはいふまでもない。知るのみでなく、實行實施してゆかなければならない。すなはち、平時の如く、幼児保育の原理から、いはゞ教育上の理想からその經營をするだけでなく、もつこ現實な任務を、よく思はなければならぬ。そのためには、所謂、保育そのごこを理想といつたごこにのみさらはれないで、今日の對策としての適切な順應も必要であらう。具體的にいへば、保育上から家庭に要求する通園心得にしても、母の忙しさをもつこにして考慮せられるべきであらう。殊に、保育時間の如き、忙しい母のために、

適切に延長せられる必要もあらう。斯うして、形の上で、保育所の經營に近づく譯である。幼稚園は幼稚園だし、高い理想をのみかざして、今日に奉仕する心がなかつたら、折角の社會の要求にそむくものである。

しかし亦、從來の保育所が、たゞ忙しい家庭の缺陷に、兎に角も役に立てばいいといった風の、教育的積極性の極めて乏しい保育をしてゐたのと同じやうなものになつてはならない。それでは、幼稚園の幼稚園たるところを失ふのである。保育者としての理想さういふばかりでなく、前に述べた如き、母の心の底にある大切な要求を無視するのである。裏切るのである。

そこで、動員せられるさういふ意味に於て、今日の幼稚園には今日の幼稚園の問題が起つて来る。たゞありしがまゝでは、その動員に充分應じられない。さういつて、その本質を棄てゝは、幼稚園でなくなるさういふよりも、動員せられる所以に、眞に答へることが出来ない。理想と現實との、周到な考へあはせが必要になるのである。否、現實に即しての理想の實現が必要になるのである。

物資の缺乏さういふ。今日の事情からも、理想を現實に生かす工夫は、絶えず幼稚園の頭を働かせてゐる。それ以上、同じ工夫が、幼稚園中心と家庭中心との、理想と現實との間に必要になつてゐるのである。

少くも、今日の幼稚園は、保育理想や、保育趣味からのみ、保母さんに楽しみ行はれてゐるものではない。現實に對して、要求と切迫とに驅られて、或は、息せき切つて、その任にあたるさういつた情勢である。保母さんは、子どもが好き、保育が好きであることを第一要件とする。しかし、それだけで足りる今日ではない。こゝによつたら、そんな個人的心狀の如何に拘はらず、動員せられなければならないのである。

たゞ幸なことに、此の國家の動員に對して、平生から、ちやんこ備へてゐる幼稚園と保母がこの通り多くある。動員が多くなれば、尙ほ多くの豫備員が、若い女性の中に無限にひかへてゐる。そして、動員せられて、動員せられた覺悟の下に、しかも、動員せられたことを忘れる程、内から楽しみ進んで、此の任に當るのである。

見よ、今日の幼稚園の平時以上に充實してゐることを、潑刺してゐることを。動員せられた幼稚園は、正に斯くの如くである。



# 建國童話(三)

— 講習會講演速記 —

建國神話材料の選擇 今度は一つ斯ういふ方面について  
中上げてみたいと思ふのであります。

建國神話と言ひましたところで、中々材料は多いのです。  
天の八重雲を押開いてお降りになつてから、或はもつこそ  
の前の天地創造國土創造、さいふどころが相手が幼児であ  
ります。お互ひが聽かせたいと思ふが、まだ推理能力のな  
い、經驗を持たない子供であるから、それに對して如何に  
神話を語らなければならぬか、彼等の頭の中に潜在した  
意識があるとは言ひながら、これに我々が無條件で古い話  
を聽かせて判る筈のものでないであります。

第一國土創造、國の成立ち、丁度茹で玉子の崩れたやう  
にフワ／＼して、さうして固まらない中からあしの芽が出  
るやうに芽が出で來た。なんて言つたところで子供にはあ  
しが判りますまいし、それが即ち地の始まりなんだ、と言  
つたところでさうして解釋出来るか、また天の浮橋の上に

## 久留島武彦

立つて天の瓊矛をまつて海中をお探りになつた。その天の  
浮橋は舟であり、天の瓊矛は權であらう。海の中をお  
歩きになる時にその權の滴が落ちて島になつた。斯う  
言つてみたところで第一それが判らない。第一神話といふ  
ものは言語學から解釋しなければ判らない材料のものだ  
いふことも言はれて居るし、沖野岩三郎氏が近頃盛んに神  
話を解釋して居りますが、沖野君も言語學の上から今まで  
判らなかつたと思ふところの材料を非常に鮮明にされて居  
る。斯ういふやうに寔に深く難しいものでありますから、そ  
れを我々が神話の中の材料だからこれも話さなければい  
ふ捉はれた考になつては却つて神話を毒することになる。  
それで今日お互ひ子供に話すべき神話は國土創業の神話と  
いふよりも、建國神話、即ち神武の帝から始めるくらゐが  
丁度適合ではないか、

即ち神武の帝の建國創業の御事跡を子供に聽かせる。そ

の中へ我々が神話を理解して、それに心持ちを盛り添えて行く。斯ういふやうな扱ひ方が一番無難なものであり、それが皇紀二千六百年に私共が幼稚園を標準として扱ふべき材料ではないかと思ふ。ところが神武の帝の創業の御事蹟の中にも我々が困る問題が幾つもあるのであります。

例へば斯ういふ問題があるでせう。神武天皇様は御年十五歳で皇太子の御位にお即きになつた。即ち天皇様になる皇太子におなりになつた。これはよく判つたことでありませう。ところがお兄イ様がお三方おありになる。五瀬命さか稲飯命さか、兎に角、お兄イ様がお三方おありになつた。

そのお三方の一番上のお兄イ様を除いたお二方は途中でお崩れになつた。その一番上のお兄イ様は途中の大きな戦で敵の矢に中つて、これはお死になさつた。こゝで直ぐ引つかゝる問題は、さうしてお兄イ様が天子様にならなかつたのか、これは話すが引つかゝる問題である。それでこれを相當知識ある人までが神武の帝は幼い時から御英明に渡らせられたので、お兄イ様に代つて皇太子の御位にお即きになつたのであらうと、さうしてみるとお三方の兄イさんは御英明であらせられなかつたか、お父様の御眼鏡に適はなかつたかといふことであつたならば、これは現代の子供にまつて不思議なことである。話す者からしたら少しく危険な材料ではないか。

このことを貴君方はさうお扱ひになるか、

それからまた五瀬命のお歿くなりになつた事實が大きいだけ尙引つかゝる材料がもう一つある。これは浪花の津から御上陸になつて、生駒山の麓で戦をなさつた時にお負けになつて敵の矢に中つて非常にお苦しみになつた、その時に日の御子が日に向つて戦ひをなすは宜しくないから、日を背にして戦はなければならぬ。これは大事な問題でありますけれども、これをさのくらす子供にお話なさつて材料として消化することが出来るか、日の御子、太陽、天照大神、その子供、その御末、斯ういふやうなお話をさのくらすに誤らずに理解させることが出来るか、こゝに危険性があるのであります。

お日様の子、このお日様の小さいことを訊ねられたら我々はへドモドしなければならぬ。であるから私は建國神話の中の神武天皇様の御材料で、所謂う、つひ、ひ、が、み、現實の身體をお備へになり、現實に我々と同じ御生活を遊ばして居つたから話易い、理解し易い材料の下にあるのであるけれども、その中にもまだ我々に非常に危険を感じしめる文學材料が多いといふことに貴君方はお氣つきであります。だから斯ういふことに觸れるといふことは誤りだと思ふ。

だから私は先づ建國創業のお話をされるならば日向から

御發程になつた、それから話を始めるのが一番無難ではなからうか、その御發程の材料として私が擇んだのが美々津であります。

なぜ日向から御發程にならなかつたさいふごきは、これはもう簡單なごきで、文字に書いたなら二三行の説明で足りる。今まで日向にお落付きになつたけれ共、だん／＼御家來が多くなつたし、それからお世話もおやきにならなければならん、御領分もいろ／＼お廻りにならなければならん。さうして長くお廻りにならないご、言ふごきを聞かない者が出來て、そこらの者が迷惑するので日本の眞ん中にお出ましになつてあちこちお世話をおやきにならうさいふので日向をお發ちになつた。さいふこれだけで私は澤山だご思ふのであります。それから御發程、御道程、御通過になつた御道筋、これは私は寔に仕合せなごきは、この御道程には海の御道筋と陸の御道筋と二つあるごきであります。さうして海に御案内をした者、海の案内者、それから陸の案内者、こゝに良い材料があるのであります。こゝに今日の我々の生活、我々の東亞の聖戰、我々のこの現實のこの時局に對する責務、さういふやうなもの、良いヒントを與へてくれる良い材料があります。即ち我々は皇軍のために、大御稜風を廣く亞細亞に傳へるために、我々は海の御教導者にならなければならぬ。海の御案内を仕る者

にならなければならぬ。海に擴がつて行くご同時に陸の御案内を致さなければならぬ。陸にも譯の判らない、いろ／＼ならぶる神々達も居るさいふごころから、これを伐り隨へ、これを押しひろげて行つて無事に御目的地に御到着になるまでの御案内をする者、この海と陸との御教導役になつた者が、こゝに話題として取入れる必要がある。それは都合のいゝごきは海の案内者には権根津彦さいふのがある。陸の案内者には八咫鳥、この二人が寔に良い話題を提供して居ります。それは貴君方も御承知でありませう。美々津からあの七つ岩の間をお通りになつてお出ましになつた。お出ましになるさいふご、だん／＼だん／＼漕いで行く内に急に海が廣くなつて、右の山蔭、左の岩蔭を御標しるしとして北へ北へさおいでになつた。さうする内にすつと廣くなつて、さちらに行つていゝか判らなくなつた。これは一寸困つたなナミ神武天皇様がさちらに行かうかなアごお考へになつて居るご、向ふから龜に乗つて來た者があつた。ミ斯ミ書いてあります。この龜に乗つたさいふごきを今の小賢い子供ではまた疑ふものごなる。そこで私はこれは話す者の材料の生かしやうによるものご思ふが、

「あツ、何んだらう、龜に乗つて海の中から出て來た者がございます」

ミ斯ミお傍の者が申上げた。神武天皇様は小手をおかざ

しになつて御覽になつて居る。

「あれでございます。あれでございます。今頭を出しましたあれでございます。」

「御覽になる。龜に乗つたやうな姿が見える。暫く御覽になつて居る。あゝ龜ではない、丁度龜の大ききぐらゐの小舟に乗つて居るのです。こゝで小賢い子供の疑問を解く。この出来るくらの用意をして置いても宜しいと思ふ。さうして、これが漕いでやつて來た時に

「お前は何んさいふ名前か」

「珍彦ウツヒ申します。神様の御末が、この海をお通りになる。ここを長い間、今日か今日かとお待ちして居りましたが、餘りにお見えにならないので魚を釣りながらお待ち申して居りました。」

「お前はどの海が詳しいか」

「はい、何處に行けば船の繕ひが出来、山に良い木があるか。さいふこも存じて居ります。」

「それならばこちらの船に乗れ」

「さいふので神武天皇様が椎の木で作つた權をおさりになつて

「さア、これに掴まれ」

斯ういふことは餘り部分的になるのでお話なさらなく

もいゝが、船から權をお差出しになつたので

「ぢやア、御免被ります。」

「さいふの木で作つた、その權を掴へて

「いゝか、しつかりミツ」

「お引きになる。ミビヨイミ飛上り、さうして神武天皇様のお船に乗る。」

「こちらでございます。これを左にさらなければいけません。こちらの島蔭に参ります。潮の瀬が軟かでございます。」

「お前の名前は何んさいか言つたナ」

「珍彦」

「珍彦もいゝ名前だが、椎の木で作つた權で船に乗つたら椎根津彦と言つたら宜からう」

「新しく椎根津彦といふ名前を賜つた。これは幼稚園の子供には餘り名前が多過ぎます。混亂を起し易いので、兎に角、お船に附いて御案内申上げたさいふこに致します。」

「そこで私は貴君方にお考へ願ひたいのは、決して神武天皇様が特別お賢かつたから末の弟でありながら跡をお繼ぎになつたのでなくして、これはあの時代は末子相續申しまして、一番末の子が父の遺産を繼ぎ、父の跡を繼承する習があつた時代であります。それは皇室の御系圖を御覽になつても同じであります。綏靖、安寧、孝安、孝靈、孝元天皇、應神天皇前までは大概御歴代共、總領が決して跡を

お取りになつて居ない。次男か三男、それでお子様がお一方ならばお一方がお継ぎになるのが當り前でありませんが、數多く御兄弟があつた場合には下の者が相續して居る。それは古い時代の生活様式がさういふやうであつたのでありまして、我が大和民族もさういふ習慣に基いて居つたさいふこごが認められます。それは、あの時代は開墾さいふこごが自由でないので、親が子供を産みますと、親は親で元氣盛んな時代でありますから自分のこごで暮しを立てますから、總領は遠くへ放し、別な所を開墾させる。ですから日向においでになりますと判りますが、高千穂から離れた所に五瀬命の御遺跡が澤山ある。さうして次男もさう、三男もさう、四男になるごお父さんも年を重ねて來るので最後に親の許に居つて親を養ひ、親の世話をやくのは末の子がやくので、親の財産なり開墾は末の子に渡す。これを末子相續説と申しまして——その後は長子相續になりましたけれど共——日本の昔は御歴代の帝王七八代までは末子相續でありました。さういふ解釋が出来るのであります。斯ういふやうな事が判らないと、神武天皇様は四番目のお子様でありながら皇位を繼承した譯が判らない。斯ういふこごは尋常三四年の子供でも判らん、その頃は長子相續であらず、末子相續さいふ。まア斯ういふこごには觸れないのが賢い。大きい道筋だけ掴へればいふ、そこで神武天皇様の

末子相續さいふこごには何も觸れず、兎に角、神武天皇様が跡をお継ぎになつた。兄さまも言はず、弟さまも言はず、ただ御一諸にお出かけになつた。兄さまも言はず、弟さまも言はず、たムフラージしてもいふのではないかと思ふのであります。ですから五瀬命が敵の矢に中つて御苦しみになつておかくれになつたさいふ事實、それから生駒山に於ける日の御子さいふやうなこごは避けた方が宜しい、そこで熊野御上陸、それから陸の御道筋になるのであります、まア永い間の

海の旅行であつたさいふので、皆は非常に悦ぶご同時に「あゝくたびれたなア、随分永い間、お正月を七つもやつたのだから年をこつたなア、君の顔は黒いなア」

「さういふ君の顔だつて黒いぢやアないか、君なんか何時の間にか鼻の下に髭が生えたぜ」

陸に上るご同時に先づ皆これで安心ださいふので鎧を脱ぎ、太刀を解き放ちて、あの濱邊で脚を投げ出していゝ氣持ち、寄せては返す波が脚を洗つて居る。神武天皇は「知らん所だヨ、知らん土地だヨ、氣をつけなければいけない」

ミ仰せになつたが、皆は永い間の船の生活が嫌でたまらなかつたから、お叱りのお叱言に構はず、鎧を脱ぎ、太刀を横に置いて、あゝいゝ心持ちだご伸びゝして、石を枕に寝る者もある。砂濱に腹這ふ者もある。ウトウトと睡り始め

た。神武天皇様は、これは宜しくないと思召したが御自分も急に何んさなう睡くなつてウト／＼遊ばされた。その時は睡つちやアいかん、さうしてこんなに睡いのだらうミ、フイミ振り向いて御覽になるミ、山と山との間、木の茂つたところから熊のやうなものが首を出してフーツミ何か白い煙のやうなものを吹いて居る。それが兵隊の頭の上にかゝつて行くミグー／＼ミ皆駈をかき始める。ハツミお氣づきになつた神武天皇様はお立ち上りにならうミした時に、お腰にお手をおやりになつてみるミ、何時そこへお差しになつて居つたか、新しい劍があつたので、いきなりその劍を抜いてサツミお拂ひになつた。さうするミ今まで妙な白い氣を吹いて居つた、蜘蛛のやうなものは喫驚して山の中に逃げ込んでしまつた。逃げ込んでしまふミ駈をかいて居た兵隊が喫驚して

「あゝ驚いた」

「驚いたではない、お前達が睡くなつたのは常り前ぢやアないか、あの山の間から妙なものが毒氣を吹いて居たのだ、お前達が鎧を脱ぎ、矛を置いてあるので敵が毒氣をかけたのだ」

ミ言つて、ヒョイミ氣がついて御覽になるミ、この劍、今まで私が持つて居つた劍ではないが、はてさうしたのだ

らうミ思つて居るミ、そこへ見馴れないお爺さんが

「いえ、恐れながら私が持つて参りました劍でございます。私の家にこの劍がございまして、私が昨夜夢で神様の御末がこの濱にお上りになる、早く行つてこの劍を差上げたが宜しいミいふ夢のお告がございましたので、今朝起きて直ぐこの劍を持つてお傍に参りました。

「あゝ、さうか、お前か……」

こゝで高倉下の話になるのであります、高倉下が天照皇大神のお告によつて、倉の棟に劍が刺つて居るから、その劍を神武天皇に献れさいふお告の話になるのですが、さうなるミまた、さうして劍が倉に倒まに刺さつて居つたのか、その劍を誰がぶつつけたのか、また判らなくありますので、まア兎に角、その劍をお使ひになつた。さうして大變に敵を打拂ふこゝが出来たので神武天皇は、これを自分が持つて居つたのでは恐れ多いさいふので、これを神様にお祭りになつた。これが石上神宮ミ言つて官幣大社になつて居る。日本で劍をお祭りになつたのは草薙劍をお祭りした熱田神宮ミ、この神靈劍をお祭りした、石上神宮。これが劍を祭つてある日本の大きいお宮、このくらゐのこゝは時間があり、或は子供に判るならば話しても宜しい、然し詭譎劍のこゝなごは子供に判らんならば話さん方が賢いでせう。これなごは時間ミ程度によつて材料ミしてお使

ひになれば宜しいのであります。

それから神武天皇様は、あゝ大きい大和、これからやらなければならんと思つて居ります。そこに出て来たのが八咫鳥。この八咫鳥を貴君方は大概鳥を御説明なさると思ふが、それでは私は貴君方に伺つてみたいが、熊襲を書いてあるのを熊としてお扱ひになる方がありますか、ごうか、土蜘蛛を御征伐になつたといふ、その土蜘蛛を本當の蜘蛛を考へて話して居る人がありませうか、土蜘蛛は神名であります。熊襲も神名であります。襲族であります。これを熊や、蜘蛛を解せざるに、なぜ八咫鳥だけ鳥を解釋するのでせう。八咫といふのは八咫御鏡と同じ意味であります、八咫の「咫」といふ字は八寸といふ意味でせう。一尺に足りない八寸、然し八つの咫、これは決して寸法を示したものでなく、物の美稱であります。大きいとか、美しいとか、力があるとか、尊いとかいふ、八咫といふのは美稱であります。美しきといふ意味であります。ですから八咫鳥と言つても、これは大鳥とか、美しい大きい仕事をする鳥とか、神名をお呼びになつたので、これは現に御祖神と言つて下賀茂神社の御祭神は八咫鳥であります。その御祭神には立派なお名前がある。建角身命といふ立派なお名前があつて、さうして神武の帝が畝傍の櫃原にお落付きになつて論功行賞をなさつた時、外を護るつゝ、わもの、まして昔の山背、

即ち山の彼方、大和から北に向つて山の彼方、そこを護つて、北の方から来るところのあらざるものを防ぐために、そこへ落付かせた。それが、あの賀茂の流れが枝流れになつて、二つになつて、その京都の賀茂に屋敷を地面を賜つたので賀茂の建角身命といふ稱號を持つて居るのであります。でありますから皇室の尊崇が深くて祭りと言へば賀茂の祭を言ひまして、祭りの中の一、番豪華版であります。

外國人なきも斯ういふ絢爛な、斯ういふ古代な、斯ういふ文化的の祭禮の行列といふものは世界にないといふくらゐに驚くところの豪華な祭り、その祭典によつて祭られる神様になつて居る。この八咫鳥はいろ／＼歴史の研究家によります。多分黒い装束を着けて居つたらう。我々の祖先の民族は白妙、白い装束であります。それがさうして黒い装束を着けて居つたか、それから山の中の御案内といふものは決して平地を通るものでない、今日こそ路は谷間であり、平地でありますけれども、昔は一ぱいに擴がつて繁茂して居つた時代であり、殊に縦横に走つて居る河に舟がある譯ではなし、橋がある譯ではなし、そのために却つて平野は通りにくく、それで交通路は昔は山の頂上であります。臺灣では今日でも交通路は山の上であります。生蕃は今でもこそなくなりましたが、この山の上までは共通、敵でも味方でもお互ひの交通、山の上に行くまでは全速力これを





つ尾の先がビリビリッとする、これは虎の考へて居る考の動きを尻つ尾の先が代表して居る。喰はうかな、飛びつかうかな、強いかな、この尻つ尾が上がるやうになるミ危い。これが動きながらビリビリッ動きながらチヨイ、チヨイッ下れば、ヂイッ睨みつけて居るミ、人間の眼ほど危いものはない。別に私は虎から聞いたことはないが、

ヂッミ見て居る内にチヨイ、チヨイ下り始める。下り始めたならば腹に力を入れてウーンッ押しつけて睨みつけて居るミ、グッミこの尻つ尾を股の間にはさんで、はさんだ時に虎は廻れ右して逃げ出すミいふのです。これがビリッ動いた時にオドッとして居るミ、この尻つ尾がだんッ上つて来る。これなミは虎の習性ミして面白いミ思ひます。

話は元に戻つて、八咫鳥が御案内して、私が御案内すれば大丈夫でございます御案内申上げた。ミころが、これが今日まで一向傳はらないことを相濟まないと思ひまして、三四度参りまして私は調べましたが、この大和平野に御進出になるにはミのくらゐる御苦心なさつたか、その御苦心は何處で遊ばしたか、その御苦心は準備工作であります。あの熊野の山々を踏み拓いて今の大和の宇陀郡にお入りになつたさいふこは、これは容易ならざる御決心であります。陸に上つて、山の中にお入りになつてしまふミ、四方にさんなものが居るか判らない、その皇軍が地理不案内の

山の中に入つて四方から取圍まれたら全滅に陥り易い。それを唯一人の八咫鳥の御案内でお入りになつたさいふこは、八咫鳥にミのくらゐる御信任があつたか、またその役目が如何に重大な役目であつたか判る。ですからこの八咫鳥は、かアかアこちらへおいでなさいと御案内するくらのものであるミ話をしては相濟まんものだと思ふ。

そこで奈良縣の前進據點、大和平野に御進出の攻撃據點を地圖で御説明申上げませう。これは山ミさうぞお考へ下さい、斯ういふやうな關係であります。(ボールドへ略圖を書く)これが吉野連山でありまして、この奥が熊野の山々に續いて居る。それで熊野から斯ういふやうにおさほりになつて、この小山の中にお入りになつた。こゝが宇陀郡ミ今言はれて居ります。これだけが宇陀の盆地であります。さうして、丁度この<sup>うぐい</sup>狛さいふ土地で、兄<sup>あな</sup>狛さいふ者が、神武天皇様に御馳走申上げお弐し申さうしたのであります。この山が宇陀の高城、これが御陣地であります。さうして神武天皇様は

ウタノタカキニ、シギワナハル、ワガマツヤ、シギハサ  
ヤラズ、イスクハシ、クチラサヤリ、エエシヤ、オオシ  
ヤ

ミお謠ひになり、その囃子言葉までお作りになつた。その宇陀の高城が要するに神武天皇様の前進據點であります。

す。さうして、この出つばつた高倉山に登つて小手を翳して見るさ連山がある。これが龍門岳、國見岳、こちらが多武峯、天香具山、こゝで神武天皇様の御苦心になつたこゝは是非子供に聴かせなければならん。そこに幸ひ良い材料があるのです。それはこの天香具山の土を取つて、それで神々にお祈りしたならば必ず戦に勝つであらうさいふので、椎根津彦さ弟狛を遣はして土を取らしたさいふ話がある。これが子供に話していゝ建國神話の一つの材料さして私はお話申し上げます。

神武天皇様は山の上にお立ちになつて遙に御覽にならさ、あれが龍門岳、あれが國見岳、あれが多武峯、敵はあの山々に居る。さうしてあの向ふが大和の敵傍の檜原、この平地に出るにはあれを突破しなければならんが、それにはさのくらの兵隊が居るか、さのくらの敵が居るか、これを誰かに檢べにやらなければならんが、さ御心配になつて居るさ御家來の中からツカ／＼さ出て來て

「さうか私をおやり願ひます」

ヒヨイさ御覽になるさ椎根津彦であります。神武天皇様は、これを御覽になつて、

「椎根津彦、お前はもう宜い、お前は七年の間海を案内して來てくれたのだから、もうお前は充分である。それに海のごきは判つて居るだらうが、山のごきは判るまい」

さ仰せになりますさ

「いえ、それで私はいろ／＼考へましたが、良い仲間を拵へました。おい、一寸來てくれ給ひ」

うしろに手招きした。誰が出て來るかさ御覽になつて居るさ髭ムシャ／＼の眞つ黒けの男で、目は團栗眼で、鼻は開いて、寔に坐りの悪い恐しい黒い顔をした弟狛、

「弟狛ならばこの土地で生れた者、山の案内も詳しいだらう」

「さうか御用に立ちたいさ思ひますからお指圖下さい」

さいふので、そこで天香具山の土を取つて參れさ、斥候にお立てになつたのですネ。そこで、それでは仕度をして參りますさ下つたのです。あさでは

「何んさ、椎根津彦は忠義な御家來だらう、海であればさの御奉公を申上げ、また山の中に入つては山の中の敵情偵察に出かける、偉い男だなア」さ思つて居るさ、大來目命さいふ、この方は非常に目の鋭い方でありますが、この大來目命がフィツ高城の下を見るさ、下の畦道を汚いお爺さんが雨も降らないのに蓑を着て、笠を首にく／＼りつけて杖をついてトボ／＼坂道を歩いて來る。そのあさから色の眞つ黒な婆が蓑を背中につけたま／＼ついて來る。變な爺さ婆が上つて來る。さ思ふ内にこの二人が御寢所附近に上つて來るので大來目命は、何かこれは間違ひだなさ思つて

「コラコラッ、来てはいかん、来てはかん」

恐しい目を光らせたが、目が悪いか耳が遠い、か知らん顔して居る。見るに、まア何んさいふ汚いこまか、目腐れで目の廻りは眞つ赤、水漬をブラ下げてフラ／＼させながら下りやうさもしない。こゝで大來目命は聞へるやうに大聲で、

「こらッ、来てはいかんッ」

さいふ。さうするに、その年寄、手で水漬をはねたと思ふに、これはまた巧みに鼻が取れた。さうしてニヤ／＼笑ふに

「私でござんす、私でござんす」

さいふ。

「椎根津彦でござんす、お判りになりませんか」

椎根津彦、見直して見るに目の縁が赤く見えるのは赤土が塗つてある。鼻は山の芋をすつてブラ下げてあるのでございませう。

「あゝさうか、いや、一ぱい喰はされた、私でもだまされるくらゐだから、これなら八十梟帥もやられるだらう。そのうしろのおばいは何處から雇つて來た」

見るに

「私でございませう」

これが弟猪なんです。

「これがばい、このぢいばいなら敵を欺くこまが出来るだらう」

「それではこれから行つて参ります」

ミ御前を下つた。

その時にこの山の上に勢を張つて居ります八十梟帥の兵七八人、寒いので火を焚かう、火を焚いては向ふから見えるさいふので、それなら岩蔭で焚かうぢやないか、さひのきをこすつて原始人が火を作つたさいふ、この話もこゝには似つかふのであります。それから火を起さうに、木を擇んでキュ／＼ミ摩擦するに火が出て、皮が燃えて火を作るのであります。それからこの木を「ひのき」ミ名をつけた。時間が空いて、子供が興味を持つて居つたら、さういふ餘談を入れても宜しい、こゝで火を焚いてあつて居るに、夜中になるに何處にもなく音が聽える、おや、何んだらうに五六人の者は聴き耳を立て、中腰になるに、火を消さうか消さうか燃えて居る火を草の中に押込め、燃えて居る木を二三本引抜いて草の中に押込めるに白い煙がボーッ立つ、氣をつける、氣をつけるに、ヂツミ聽いて居りますに、聽え聽え始めたのは、へッ、へッさいふ聲、八十梟帥の兵は弓をこつて火打石をこがらした矢の根を嵌めて、氣をつける、氣をつけるに言つて居る中に

「おい、心配するなッ、年寄だよ、年寄」

へッ、へッ、躓てこれが近寄つて来るミ、燻つて居る木を引抜いて上に騎して振り廻す火がポーッミ燃え始めて松明ミなつて、二三十メートル先まで見える、それを上に指騎し、下に照し出されたのは汚い年寄、闇にも判るのは水漬をすゝりながら杖をついて、へッ、へッミ上つて来る姿、

「こらッ、止れッ」

さうするミ年寄は唯すくんでガタ／＼震え始めた。一人かと思ふミ一人ではない、あミから婆も見えるが、餘程狼狽えたミみえてお爺さんにしがみついて顔を囊の中に押込んで泣き始めた。さうして

「私は下から上つて来ました」

こいふ、

「當り前だ、下から上らなければ上れるか、何處に行くのだ」

「山を越えて逃げやうミ思ひます」

「それならなぜ晝間逃げないか」

「晝間は戦が怖いので夜になつて上つて参りました」

腰にしがみついて婆さんは身をもだえて聲をあげてお爺さんやアお爺さんやミ泣いて居る。餘りにその姿がおかしいので八十梟帥の方では腹を抱えて笑つて居る。

「何んだか臭いぞ、早く行け、早く行け」

二人は

「さうも有難うございます」

ミ言ひながら燃える火の影を背中にして暗闇の中に坂を下つて行く、これを見て

「さうだ、あんな爺でも頼りになるのか、婆は爺にかちりついて震えて居つた」

ミワー／＼笑つて居る。一方椎根津彦は

「弟猪、お前もうまくやつたなア、顔を俺の囊の中に押込んでなア、若し頬被りを取られたら直ぐ髭だらけで顯はれるのに、うまくやつたなア」

さうして無事に天香具山の土を取つて歸りこれを神武の帝に差上げるミ

「いや、よくやつた。あの姿ならばこちらでも判らない」

ミ仰せになつた。こゝを嗤岳こいふ名前傳へられて居ります。一フイート五インチぐらゐの谷間の路で、私はそこへ行つて見て、私は面白いのでステキでついてみました。斯うして椎根津彦がついて上つたのだなミ思つて。私は弟猪の真似をして、へッ、へッミやつて上つて行くミ、昭和十五年の久留島武彦は二千六百年前の椎根津彦ミ弟猪になつた氣がして、なんだか、この邊がモヂャ／＼して、あゝ愉快だなア、我々は遠御祖の皇軍に盡した足跡を今日

まざくゝミ踏むこぎ出来る。私が二千六百年前に居たならば椎根津彦であつたか、弟猾であつたか、椎根津彦が今日居つたならば、今日また私の眞似をしてステッキをついて歩くだらうと思ふよ、二千六百年は昨日のやうでもあり、今日のやうでもある氣がする。斯ういふやうな解釋の下に、子供に話をするこぎが必要ではありませんまいか、第三者にしてしまふ必要はない。自分であるミ解釋する必要もない。兎に角、古き話に新しき心持ちを持たせるこぎに、この働く力がある。さうして噴岳、斯ういふ嗤ひこいふ字が使つてある。これはあざわらふ、こいふわらひであります。だからあざわらつて

「馬鹿だなア、俺が斥候であり、重き任務を持つた假裝武者であるこぎを知らないのか」

こいふ椎根津彦、弟猾の笑はれた噴岳も思へる。また「こんな汚い爺が、婆が」

ミ侮蔑してあざわらつた八十梟帥の嗤ひこもなる。

いづれにしてもこの字は面白い字であります。樞原にお参りになつた場合には、さうぞあれからお廻りになれば松坂、名張、榛原、この榛原さいふ驛があります。急行だけは止りませんが、當り前の電車は止ります。榛原からは乗合バスがあります。そこからお入りになりますミ松山さいふ町があります。その乗合バスで猾村に行けば、兄猾が

神武の帝をお招きになつて御馳走するさいふ名目の下に踏落しを造つた跡がある。昔から野蠻時代には猪や猛獸を捕るには踏落しを拵へて捕つたものです。その踏落しを拵へた跡が猾村に大殿さいふ字で残つて居ります。その前に血原さいふ小さい橋がありますが、これは兄猾を誅戮遊ばされた、その時に血に染めたさいふので血原橋さいふ。その上に山の神を祭つた古墳がありますが、その古墳はまぎれもない兄猾を埋めた古墳でありまして、それを裏書する猾神社さいふ小さい神社があります。近頃では弟猾を祭つてあります。

これは餘談でありますが當時の神武天皇の御精神は、その地方に勢力を持つて居る土地の豪族なごを必ず一度お招きになつて歸順をすゝめ、歸順しないこぎになるこ、初めてこれを御誅伐になつた。御誅伐になつたあごは必ずこれを踏みにじらずに神に祭つてある。これは大和民族の抱擁力さいふか、同情心さいふか、實にこれは祖先の解釋さして非常に大きい解釋であります。一度は敵さなつても、これを従へた後は——これを愛撫し、若し従はなかつたならば、これを御誅戮になつて、その後は——これを神さ祭る。あの紀伊の勝浦に御上陸になるミ丹敷戸畔さいふ者が神武の帝に叛いたので、これを御誅戮になつた。さうしてこの丹敷戸畔を神さして神社に祭られた。天津神、國津神さい

ふいごがございませう。國津神さいふのは大和民族でない、その郷土に居つたまころの昔からの力有る者の祖先、それが國津神であります、大和民族は抱擁力の強い、敵の立場を認識し、まつろはざる者は討つて、これを討つたならば、これを従へて我が兄弟同様に扱ひ、或はこれを倒しても神さして、それ以外に尊敬を與へる。これなきも今日では猶神社さしてこゝに遺つて居ります。

それから先程申しました天香具山の土を持つて歸つて、これがさうなつたか、これが今日最も由緒ある、最も尊い、さうして上御一人の御歴代に於てこれほご大きい御盛儀はないと思はれる御即位式の時に、これが遺つて居ります。天香具山の土を持つて歸つた、その間には敵情もお聴きになつたであります。敵の準備工作も檢べて申上げたに違ひない。

そこでこの土を取つて手扶てくひさいふものをお造りになつた。それから八十平やそひら釜さいふものをお造りになつた。それにいろ／＼のものを入れて天津神、國津神をお祭りになり、戦勝をお祈りになつた。

さうして、この徳利皿を持つて、神武の帝は皆集まれさ仰せられたので、皆それ／＼帝のあこについて行くまこの川の淵にその二つを持つておいでになつて、よく見て居れさ仰しやる。

見て居りますさ、山川のこゝですから鮎が溯つて行く」あ、鮎だ、あれは鮎だ」

「押しはいかん、押しはいかん」

「黙つて居れッ、やかましい」

ミ部隊長に叱られて氣をつけの姿勢で見居る。

さうするま神武天皇様はお皿を水の中にお入れになつて

「この皿、この徳利が沈んで後に魚が浮いて、木の葉のやうに流れて行つたならば必ず今度の戦は勝つぞッ」

ミ仰せになつた。

「さア、大變だ、よく見て居ろッ」

皆目を皿のやうにして見て居るま、ガブ／＼／＼ミ徳利が沈んで、お皿が沈んで、お皿の間を逃げ、徳利の間を逃げ、魚が逃げる。浮かんズ、浮かんズ、見て居るま魚が浮かん。聊か心配になつて來た。魚が浮かない。見て居るま二十メートルほご下に居るま三十名の兵隊がワツツミ聲を上げた。見るま白い腹を水の上に見せて流れて來た。浮いた浮いたさいふ中に魚は腹を見せて木の葉のやうに流れて來る。神武天皇は

「勝つぞ、勝つぞ」

ミ、こゝで軍を進めて行かれた。

敵はさア戦ださいふので一生懸命防禦をやつた。その間に神武天皇様は一隊をぐるりま後ろの方から大廻りされて

敵を左の後ろから攻めて、兩方からお攻めになつた。

その結果到頭萬歳々々、一番終ひに敵を一番強くやつつけられた時に御弓に金の鴉が来て、敵が目をあげられないほぎ鋭い光りを見せたので

「金の鴉ではないか、金の鴉ではないか、神武天皇様のお弓にしまつて居る」

こゝで敵をお討ちになつて大和においでになり、橿原で御位に即かせられたのであります。

その御戦を手扶の酒瓮で御占になつたさいふので、御即位式の時に紫宸殿の南の階の下に立てる萬歳旛の模様に織り出してあります。この萬歳旛の下に内閣總理大臣が立つて高御座に對し、この旛竿を揺り動かして「萬歳」ミ言ふ。

その時にラヂオで日本全國、時を合せて一億の日本人が「萬歳」ミ申上げる。もう一度内閣總理大臣が旛竿を動かして「萬歳」ミ言ふ、日本全國で「萬歳」ミ言ふ。三べん「萬歳」ミ言ふので、これを萬歳旛ミ申上げる。さうして大事な御即位式の最後の括りをする。

その萬歳旛を御覽になりますミ、錦地の中に斯ういふやうに川の波の模様が織り出してある。さうして、その下に手扶のお徳利の模様がある。これが一番尊い御旛であり、御即位式の括りであるミすれば、二千六百年前の菟田川で浮いた魚の印が二千六百年續けて皇軍のめでたき、皇軍

の御榮えの彌々益々榮えさせられる御即位式の御儀式の旛の上に皆が忘れないやう御魚の模様がつけてあることを考へてみますミ、日本は昔から今まで、何千年續かうが變らない。何万年續かうが變らない。一つの魂、一つの心持ち、一つの力、一つの命によつて私共は固まつて居る日本人であるさいふこころは何んミ嬉しいこころではありませんか、強いこころではありませんか。

斯ういふ工合に建國神話を童話化して使へるだけの範圍のものを使ふだけでも充分に五回や七回お話なさるこころが出来るミ思ふのであります。

冀は今からでも尙遅くない。あこ半年ありますから、折角この半年の間に人ミして子供の魂を培はれるミ共に、國民ミして、この良き雰圍氣、良き境遇、良き今の時代の波に乗つて、これを利用して、活用して皇國精神を植ゑつけて置くこころも必要ではありますまいか。

大變暑苦しい間でありましたが、よく終始御清聽下さいまして有難うございました。

〔三六〕

# 毎日の保育問題(三)

上 澤 謙 二

## 三、はまたくてもはけない子供

子供の靴下がぬげた。

『先生、ぬげちやつた』こいつて、持つてくる。

『さう——ひきりではいてごらんなさい。Nちゃん、ひきりではけるでせう』こ、先生がいふ。

申すまでもない。『自分のことは自分でする』を實行させるためである。依存的態度を排除するためである。自立的精神を涵養するためである。

いはれて子供は、そこへ腰をおろして、ひきりでやり出す。先生はそばへ立つて見おろしてゐる。

なか／＼はけない。

そこで先生が聲をかける。

『さあ、しつかりやつて』

それは聲援のつもりである。

けれども靴下は、両手でいくらひつぱつても、相變らず踵のところでつかへてゐる。

『一生懸命にやれば出来ないことはないのでせう』

それは奨励のつもりである。

先生の頭の中には、さこかで聞いたか、何かで讀んだか飽くまでも子供自身にやらせよ、むやみに手傳ふのは自發的活動を阻むものである。『こいふやうな意味の言葉が閃めいた。』

『今こそそれを應用してゐる時だ』と思ふ。

けれども靴下は、やはり同じあたりに停滞してゐる。

『考へてごらんなさい、おちついて考へれば出来ますよ』

それは指導のつもりである。

けれども靴下は依然として一インチも上へ上がらない。子供はじれつたくなつた。先生もじれつたくなつた。こ



つちが先かは分らないが、子供が「いや、いやッ」といつて、靴下をはうり出したのミ、先生が「だめ、だめッ」といつて、頭をふつたのミ、殆ぎ同時であつた。

子供はワツミ泣き出した。

「依頼心が強くて、意志が弱いことは、豫て分つてゐるがこれ程仕向けてやつても、やはりこの有様だ。困つた子供だ」

先生はさう思ふ。

それは先生の思ふ通り、この子供は「依頼心が強くて、意志が弱い」のである。けれども、この場合は、先生にいはれるミ、自分でやり出したのである。さうして幾度か繰返して試みたのである。

さて「自分でやり出す」ミは、自立的な子供のすることではないか。「幾度か繰返して試みる」ミは、意志の強い子供のすることではないか。だから、この場合だけは、この子供はいつもミは反對だつたのである。『やはりこの有様』ではなかつたのである。そこには、この子供ミしては稀な程の強い動機が生じ、深い努力が拂はれたのである。それにも拘らず『やはりこの有様』ミはれるやうな結末になつたのは、さうしてだらうか？。

一言でいへば、折角生じた動機ミ、拂はれた努力を、發展擴充しなかつたためである。

先生はいふであらう。

『それは何事？。發展擴充させるために、聲援もし、獎勵もし、指導もしたではないか』ミ。

これも先生のいふ通りである。けれどもそれは先生だけのことで、子供に取つては、一聲援にも、獎勵にも、指導にもならなかつたのである。

なぜだらう？。

先生は子供のそばに立つてゐるのである。見おろしてゐるのである。さうして切口上式の口吻でいつてゐるのである。要するにそれは傍觀的態度なのである。批評的態度なのである。かういふ態度からは決して同情同感、共鳴共感、は、生まれてこないのである。

養えた心を元氣にするから聲援であり、弱つた力を強くするから獎勵であり、迷つた考を明らかにするから指導である。同じやうに聲帯をふるはせて唇に乗つて出る言葉でありながら、普通のミ違つて、さういふ魔力があるのは、衷心の同情と共感から發してくるために外ならぬ。だからそれを缺いた傍觀的批評的態度から出てくる言葉は、いかに親しげで美しくさうでも、相手の魂に觸れるべくもない。従て聲援にも、獎勵にも、指導にもならないのである。

「あの子供が、よくもひさりでやり出した、さうして度々やりかへす。けなげなものだ」

先生は先づ感謝せねばならぬ。

「さうかしてうまくはくやうにしたい」

次にかういふ願ひが生まれねばならぬ。

「さあ、はいておくれ、さうぞひさりでうまくはいておくれ」

その次にかういふ熱望が湧いてこなければならぬ。

「ああ、あんなに一生懸命にやつてる。手を貸してはかせてやりたい」

さういふ氣持にまでならねばならぬ。その氣持が立つてゐた先生を自然にしやがませる。あはや手が出さうになる。けれども我慢して出さない。手の代りに言葉が出る。

『Nちゃん、えらい、はけるわよ、きつさひさりではけるわよ』

『ほら、少しはけた、もうさう／＼はけるわよ』

さういひながら子供の身體がうごくと共に、先生の身體もうごく、子供の手にかははるゝ共に、先生の手にも力がかははる。子供の息づかひが高くなるゝ共に、先生の息づかひも高くなる。

そこまでのゆかねばならぬ。

言葉を變へれば、子供の心と先生の心が同じにならねばならぬ、子供の努力と先生の努力がいつしよにならねばならぬ。

それではじめてはけない靴下がはけるやうになるのであらう。

#### 四、二十年後の將來を保育する

この頃、省線の驛なきで『一列に』とか『順々に』とか、大きく書いた貼札が見受けられる。今までも切符賣捌口のところに小さく『左から右へ』さういふやうな字が書かれてあつたが、これでは徹底しないところへ、且つは容易ならぬ國民協力の非常時になつたので、かういふことになつたものと思はれる。

それにしても、その大きな貼札を見て、愉快に感ずる者は先づあるまい。情けない感じ、恥かしい感じ、淺間しい感ずる人もあるだらう。

苟も東亞新秩序の舵を握り、世界の現状に貢獻しようといふこの國民にして、而も輦轂の下にある首都の市民が、恰も幼稚園の園児にでも見せるやうな揭示を、白晝公然と目貫の場所へ掲げられるとは、何ぞ意外な——意外なだけに正に情けない、恥かしい、淺間しい、こゝではあるまいか。

これは今にはじまつたことではない。由來日本國民はかういふ社會的訓練が下手なのである。そのために、お互にぎれだけの不便さ、不都合さ、不利益さを蒙つたかは、蓋し想像以上であらう。

もしこれが訓練の如何によるものとすれば、すべて訓練たるや、早きに始めるに若くはない。もし幼児時代に出るものならば、その時から始めるを賢しとするこゝいふを俟たぬ。

こゝろで『一列に並んで順々に進む』こゝいふことは、幼児にも出来るこゝろである。けれどもこれは團體的生活に於てでなければ出来ないこゝろである。さうならば、幼児が團體生活をするこゝろたる幼稚園が、その唯一無二の訓練場となるこゝろは、自然であり必然であらねばならぬ。

そこで『一人／＼順々に』の訓練が、幼稚園ではじまるのである。運動場から建物の中へはいる時、めい／＼下駄箱へ履物をしまつて上がる。その時がその訓練に恰好な機会となるのである。

こゝいつて、表から内へはいる時、いつもその訓練を施すことになるが、いかにも固苦しくなる。潑刺たる子供の生活を規律づくめにする嫌ひがある。それで一日に一回、大概初めてはいる時だけにする。

先づ先生がみんなに向かつて『一列に並んで順々にはいるこゝろ、前の人が履物を入れてしまふまで立つて待つて、濟んだらするこゝろ』をいふ。

『さうするこゝろきれいですよ。ごた／＼しないでちやんこ入られますよ。下駄箱のこゝろで泣くお友達なんかなくな

りますよ』こゝいつて、さて『みんなさうする?』と聞く。  
『ええ、します』と、みんなの答がある。

新しくするこゝろの意義を、幼児なりに理解させて、實行しようといふ動機を作るこゝろである。これが第一段階である。

『それでは先生が下駄箱のこゝろで見えますからね。よくやつて見せて頂戴よ』こゝいつて、そのやうにする。

『先生が或る期待を持ちつつ、監督しつつ見てゐるから、それに副ふやうに、背かぬやうに、しつかりやう』

そんなむづかしい言葉で子供は思はないが、しかしさういふやうな心持で、めい／＼ちやんこやる。

中へいつてから、先生がいふ。

『みんなよく出来ました。さの靴も、下駄も、きれいはいつて、いい氣持でせう。それから、おしくらまんじうしてきたつたり泣いたりしないで、いい氣持でせう。いい氣持の人、手をあげて』

みんな勢ひよく手をあげる。

實行して、その快味を心的物的兩方面から經驗させる。

しかしその實行の動機は、先生の働きかけによつて起つたもので、まだ他律的である。時々順番が前後して、先生が聲をかけるこゝろもある。秩序が亂れて、手を出して肩をおさへて『Aちゃんはこちらでせう。Eちゃん、そんなに先

へゆかないで』なきごいふこともある。これが第二段階である。この状態は可なり長くつづくが、注意されることは次第に少なくなり、遂に殆どなくなる。

『先生にいはれなくても、みんな自分でよくやれるやうになつたね。もう、先生が見てるなくても、おまちがひしないで、順々にちやんこやれるでせう。さう?』と、先生が聞くさ、子供達は口々に『やれます〜』と答へる。

『ちやあね、先生はお目々をキツまつづつて、見ないで、下駄箱のまごころに立つてゐますよ。だから、先生が大きなお目々あけて見てゐる時よりも、よくやつて頂戴。やれるね』

さういつてその通りにするさ、子供は自分のすることに新しい興味と緊張さを感じて、なか〜よくやる。

中へはいつてから、先生がいふ。

『先生は目が見えないから、お耳で音だけ聞いてゐるだけさ、ガタン〜したりバタン〜したりしないで、みんなしづかによくやりました。えらくなりました』

時には、目くらでゐるさいふことにしても興味が惹かれて、先生の前で、わざとちよつと手を舉げてふざけて見るやうな子供もあるが、全體の緊張感の方が強いので、すぐやめてしまふ。さうして自分もちやんこやる。

この場合、目がなくなるさ共に監督の意味も殆どなくな

つて、耳の働きだけが残るさ共に、期待の部分だけが残る。それだけ動機に他律的の要素が減じて、自律的の色彩がほの見えてくる。これが第三段階である。この状態はそれほど長くない。

『もう先生がゐなくてもいいでせう。先生の代りにお當番の人に立つて見てもらひませう。お當番の前でも、先生がゐる時と同じやうに出来ますね』

先生がいふさ『出来ます〜』とみんな答へる。

『でも、もしおまちがひした人があつたら、お當番はしづかにいつてください。それからお當番にいはれたら、先生にいはれた時と同じやうに、誰でもそのいふ通りにするのですよ』と、念を押しておく。

園児のうちのお當番が二人、先に下駄箱のまごころへいつて立つてゐるさ、子供達はいつものやうにはいつてゆく。

中へはゐるなり、みんなの前で、先生が二人のお當番に聞く。

『さうでした。よかつたですか、それさもおまちがひがありましたか』

『よかつたです』と、一人が答へる。

『おまちがひありません』と、もう一人が答へる。

『それはえらい〜』と、先生が手をたたくさ、子供達はそれに釣込まれて、ニコ〜しながらパチ〜と拍手する。

十年二十年後の必要にも應ずるものなのである。

## 直接購讀のお願い

本誌の御購讀の方々の中、取次書店を経て居られる方々に對し、その御高誼を謝してゐますが、爾後は單なる購讀者として、なく、本會々員として登録申上げ、會員としての御親しみを御便宜を加へ度く存じますので、相成るべくは直接御入會のことに願ひ度いと思ひます。お早き御申込みをお待ちいたします。

昭和十五年十月

日本幼稚園協會

時には『Oちゃんかぶさけました』とか『Rちゃんがめてもききませんでした』とかいふやうな報告を受けることもあるが、それは水が流れる間に、石にぶつかつて音を立てるやうなもので、大勢は順調に進んでゆく。

ここでは先生の介入は全くなくなつて、事柄はすべて「自分達の世界のもの」として運ばれる。それだけより自律的になつたわけである。これが第四段階である。この状態はややつづく。

『みんなよくやれてきましたね。もうお當番が見てゐなくても、自分達でよくやれるでせう。やれますか』と、更に百尺竿頭一步を進める。

『やれます〜』と、異口同音。

かくて漸く自律的な状態が作り出される。これが第五段階で、終局である。

勿論幼児のこころである。社會道德への自律的順應が日毎誤りなく行はれるといふこころは到底むづかしい。Sちゃんがだれるこころもある、Uちゃんが狂ふこころもある。Yちゃんがはづれるこころもある。けれどもそれは交るゝで、全體がさうなるのではない。大多数は軌道に沿つて進むので、自發自律の空氣は崩されずに行はれてゆくのである。

『並んで順々に進む』といふこころは、毎日の保育にも必要なこころであるが、それは目前の必要ばかりではない。實に

# 十月の保育

及川ふみ

幼稚園の一年を通じて、一番おちついたよい保育期はこの第二学期であらう。わけても十月、十一月はその中でも最もよい保育の時期である。保育行事も盛に行はれて、運動會に、遠足に、園の内外で幼児たちを樂しませる事も多ければ、それ等の好機會を促らへて保育の内容を充實させる数々のものがあるさきでもある。

幼稚園の内外に觀察の材料も豊富な時期である。毎日眺めてゐるのも何の木か、何の葉か何の實かさへもわからないで過すころもあるものである。手折つたり、拾つたりして與へられるものは出来るだけ幼児たちに知らせ、おもちゃにさせてもよいし、又保母の方で何かにつくれるものであればこしらへて見せてもよい。又蟲や赤さんぼなぎの手近にゐるものについての觀察も見のがしには出来ない。

十月こそは、室内保育よりも屋外保育の絶好の季節である。幼児と共にいざ屋外へ。

第一週 九月三十日——十月五日

月

お話 十月一日よりの防空演習について  
唱歌 遊戯コツキフレフレ 小鳥のお話  
自由遊びの時に駆けっこ

火

十月一日  
明治神宮遙拜式  
自由畫 柿 柿は枝についたものがあればよいが實だけでもよい。

粘土 柿

水

唱歌遊戯 コツキフレフレ 小鳥のお話 愛國行進曲  
 鈔仕事 自由製作

紙の代用に幼稚園の庭の木の葉を用ふ。出来上つたものは製作帖に貼らずに、古新聞紙にはつておく。これは保存には不適當なところもあるが、幼児の工夫するところに重點をおいてして見る。

## 木

お話

ヌリエ ホ、ヅキ

自由遊び 繩まび 一人飛びの出来る繩を用意して繩まび遊びをさせる。これは跳躍で全身の運動になつてよい。はじめはなか／＼まべないが、練習する間に飛べて来る。遊戯の時にピアノに合わせて飛べる様になるまでにする。

## 金

自由畫 數人の幼児に新聞紙或は包装紙なごに大きく毛筆で畫かせる。他の幼児は普通の自由畫帖に畫き次回に交代する。毛筆は不用意には畫かれないから幼児自身でもおちついて畫くであらうし又、畫き上げたものに筆勢に味のあるものである。

自由遊びの時に繩まびをつゞけてする。

唱歌遊戯 愛國行進曲、日の丸行進なき運動會の練習をする。

第二週 十月七日——十月十二日

月

運動會の豫行練習

火

運動會

附屬幼稚園の運動會は學校全體で舉行するのであるが幼稚園は午前中だけで、午後は一度解散して自由行動とする。

遊戯 小鳥のお話 コツキフレフレ 愛國行進曲

日の丸行進 附屬小學校低學年ご合同

競走 各組男女別にする。

水

お話 きのふの運動會

自由畫 運動會

木

唱歌遊戯 松ボツクリ

ヌリエ 柿

金

ラヂオ童話

鈔仕事 木の葉を材料とする。

土

お話 火曜日の遠足芋掘りのお話  
自由遊び 縄こび

第三週 十月十四日——十九日

月

唱歌 松ボックリ  
遊戯

テル／＼坊主つくり

火

久米川學校農園へ遠足

高田馬場午前八時半集合 午後二時三十分解散 保護  
者の有志者は参加してもよい。

水

お話 靖國神社臨時大祭について  
久米川遠足についての話合ひ

自由畫 久米川遠足の自由畫

神嘗祭のお話

木

神嘗祭休日

金

鋏仕事 古端書で小猫をつくる  
ヌリエ 模様 お魚

土

鋏仕事 古端書で小猫のお家をつくる  
第四週 十月二十一日——十月二十六日

月

お話

鋏仕事 古端書で鶏小屋つくり

火

唱歌 幼稚園のお庭  
遊戯

鋏仕事 鶏小屋つゞき

水

粘土 自由製作

木

お話

織紙 古端書にて市松

金

保護者會 幼児お休み個人的に懇談す

土

唱歌 幼稚園のお庭

遊戯

自由遊び

第五週 十月二十八日——十一月二日



お話 日曜日のごまの話し合ひ

繪ばなし

織紙 古端書

唱歌遊戯 兄弟雀

粘土 自由製作

自由畫 毛筆にて新聞紙にかく事、數人の他は自由畫帖

に畫く

ヌリエ 落葉

園内の落葉拾ひ いろ／＼の種類を拾ひ集め形、色、そ

の數なきについて話し合ふ

新聞紙或は包装紙に種類のごまなつたものを貼つて木葉

の名稱をカタカナで書いておく

唱歌遊戯 兄弟雀

ラヂオ 童話

お話 明治天皇様の御事 明治神宮

自由畫 庭の草花

最新 幼稚園唱歌集

定價 送料 發行所 日本幼稚園協會

目次

- 一、コキフレフレ 倉橋惣三作曲 十二、たんぼぼ 大森敏子作曲
- 二、幼稚園のお庭 倉橋惣三作曲 十三、すゞめ 三雲泰子作曲
- 三、だるまちゃん 楠正子作曲 十四、チュウリップ 久保紀子作曲
- 四、お洗濯 相田多雄作曲 十五、春が来た 池田政子作曲
- 五、汽車 土田千草作曲 十六、貝拾ひ 高城富貴子作曲
- 六、雲よ降れ降れ 辻繁作作曲 十七、角力 宅孝二作曲
- 七、煙 津村滿喜子作曲 十九、七五三 土田千草作曲
- 八、てんとう蟲 清水あき作曲 二十、鬼ごっこ 高城富貴子作曲
- 九、春 井上武士作曲 廿一、お母さま 西村美奈子作曲
- 十、お窓の雨 伊藤逸子作曲 廿二、てんてん 高城富貴子作曲
- 十一、小鳥のおはなし 杉山米子作曲 廿四、春の野花 舟宅孝二作曲

目次を御覧下さつてもお分りのやうに、歌詞の中には、倉橋先生のお作のものが二つもあり、又フレール賞入選の童話、小學校生徒の詩になるものあり。幼稚園唱歌の歌詞としては申分のないもの。作曲者又、皆、斯界の權威者であると同時に、幼稚園唱歌に對して經驗と興味と理解との三つを兼ね備へられた方々ばかりでございますので、之も申分のないものであることは言ふまでもございませぬ。御希望の方は定價と送料とを添へて、本會宛てお申込み下さい。(編輯係り)

### 三等 紅ちゃん朝顔

福 山 隆

朝顔の種子の紅ちゃんホンは、まあるい／＼お顔をして、なんにも知らずに、ぐつすりおねんねをして居ましたの。

するさ、さてもやさしい聲で、春風の小母さんが「紅ちゃん！紅ちゃん！！もうおつきなさいな。白ちゃんバイも青ちゃんチンも、もうさうにお目を醒ましてよ」さ着て居た上のお蒲團をスーッスーッ撫でましたから、紅ちゃんは

「ウム、ウー」さ云ひ乍らお目をあけて、上のお蒲團をパッパッはいでひよつこり起き上つて見ますさ、お兄ちゃんの白ちゃんもお姉ちゃんの青ちゃんも、にこ／＼してこつちを見て居ますから、紅ちゃんは少し恥かしくなつてもぢ／＼してしまひましたの。

「お早う」

お兄ちゃんの白ちゃんは元氣な聲で呼びかけて呉れました。

「あらお寢坊ちゃんね」

お姉ちゃんの青ちゃんは嬉しさうに體をゆすぶりました。

それから毎日、ぼか／＼さ暖いお日様が照らして下さいましたから、三人はずん／＼大きくなつて可愛い葉っぱがもう大分大きくなつて來ました。

でも、をかしい事には紅ちゃんも白ちゃんも青ちゃんも、大すきな坊ちゃんやお嬢ちゃん達

を、まだ一度も見ることが出来ません。

「さうしたんだらう」紅ちやんは不思議さうに云ひました。

「本當にさうしたんだらう」お兄ちやんも云ひました。

「此處はたしか幼稚園のお庭の筈なんだけれぎ」

「お姉ちやんも云つて居ます。三人は何か知ら淋しくて毎日「明日は」明日は」を待つて見ましたけれぎ、なかなか人の影を見る事が出来ませんでした。

其のうちに、いつだつたか薄黒くよごれた猫の小父さんが、のそり／＼通りかゝりましたから、紅ちやんは思はず大きな聲で

「小父さん、小父さん」を呼びかけます。猫の小父さんは、キラリ光る目をこつちへ向けて、「何だい」をつまら無ささうに云ひました。紅ちやんは吃驚しましたけれぎ、

「小父さん！ 此處幼稚園のお庭でせう、それにだあれも出て来ないのよ、さうしたんでせう」  
「うむ、幼稚園のお庭には違ひ無いけれぎ、誰も居やしないさ」

を云つて向ふの方へ行つてしまはふさしますから紅ちやん達はもう一度大きな聲を出して、  
「あつ小父さん、待つてよ、少し待つてよう」  
を云ひました。

「さうして誰も居ないの？」

「さうしてつて、戦争があつたんだよ。」小父さんはやつをそれだけ云つてうるささうに、  
さう／＼行つてしまひました。

「戦争！」

三人はさても吃驚してしまひましたの。だつて此の間迄何も知らずに土の中におねんねしてゐたんですもの、飛行機が雷様の様な音をたてて空中戦をしたり、戦車がさう／＼／＼／＼／＼お家も塀も道も木もゆすぶり乍ら通つて行つたり、海みたいな大きな楊子江の濁り水の中にか

くれて居る危ない、水雷を爆發させながら、ぐんぐん進んで来た軍艦の事も、十日も御飯を食へずに生のお芋許りがちりながら、ひざいお道を歩いて来た兵隊さんやお馬ちやんの事なごもちつごも知りませんでしたからね。

「ねえ白ちやん、戦争つてこわいものなんでせう」

「うん、どうしようか知ら」

三人はまだあんまり長くなつて居ないお手々を伸してぎゅつぎゅつなぎあひました。斯うして居れば少しはこわいのが忘れられるからです。

それから暫くたつた或日、お庭の向ふの方がきてお賑やかにになりましたから、紅ちやん達は何が始まるのかと思つて、そつ草の蔭から覗いて見ますと、可愛い、子供達が澤山集つて来て嬉しさにしてゐます。

「おやつ」

紅ちやん達は思はず聲を立てました。何故つて、青い支那服を着た子供の姿は一人も見えずみんな、日本の子供達許りだつたからです。

「怖いわ、怖いわ」いまにちぎられてしまふかも知れない」

と姉弟妹三人は草の蔭に小さくなつてかくれて居ました。

「ちりーん、ちりーん」

どこかで鐘が鳴りました。がや／＼／＼／＼聴えて居た子供達の聲がびつたり止んでお行儀よくお庭に並んで居るのが見えました。と、「キミガヨーハー」高い竿を新しい日の丸がスル／＼と昇り始めました。小さいお手々をきら／＼と両脇に垂れて子供達は誰一人身動きもせず昇るお國の旗を見上げて歌ひました。草の蔭から覗いて居た紅ちやん達が此の様子を見てそんなに驚いた事でせうか。

それから毎日幼稚園のお庭は賑やかでした。お砂遊び、鬼ごっこ、兵隊ごっこに飛行機飛ば

し、まゝに、繩飛び、お國を遠く千里離れて来て居るやうな氣もせず、子供達は皆元氣で  
びました。

お庭の隅にびく／＼しながら暮して居た紅ちやん達が、鬼ごっこをして走つて来た一人の男  
の子に見つけ出されたのは其の頃でした。

「オーイ、みんな来てごらんよ、こんな所に朝顔が生えて居るよ」

「あつ可愛い、朝顔だね」

「お手々ないでるわ」だあれも可愛がつて上げる人がなかつたからかも知れないわね」

「うん、さう／＼棒を立て、上げようよ」

みんなはばら／＼走つて行つて、なるべくきれいな棒を見つけて来ました。「うん、うん」  
と、小さいお手々に力を込めて、みんなは一生懸命に竹の棒を立てたのです。

「さあ、こつちへおつかまりよ、朝顔ちやん」そんな所からんでるたらだめぢやないの」  
「さう／＼してあげないとお手々が痛いわよ」「出来たよ」「出来たわ」

こ子供達は本當に一生懸命でした。

いぢめられて、ちぎられるかと思つて居た紅ちやん達は、きれいな手頃な竹の棒を立て、も  
らつて、まるで夢の様でした。うれしくて／＼たまりませんから、一人でにす／＼／＼  
伸びて行つて、もうぐる／＼／＼竹の棒をからんで上の方迄行つてしまひましたの。

そして紅い花が咲きました。白い花が咲きました。お空の色の青い花も咲きましたの。  
恰度、紅ちやんのお母さん達が咲いた様に紅ちやん達も今こんなに美しく咲いたのです。

「もう先此處のお庭で、斯うして、紅や白や青のきれいなお花を見て喜んだ、お名前も知らな  
い支那のお友達は、今ごろさうして居るか知ら、でも貴方達の可愛がつたお花を私達も可愛が  
つて上げてゐるのよ」と、毎日子供達は胸の底でさう思ひ乍ら紅ちやん達をながめました。

おはり

フレイベル賞 入選童謡

佳作 てんとう蟲

清水 あき

(1) てんとう蟲は赤い服

黒いボタンがテンノテン

(2) てんとう蟲は黒い服

赤いボタンがテンノノ

(3) てんとう蟲はかくれんぼ

テンノノみえたりかくれたり

佳作 ピアノのお道

川口 幸子

はねるよ／＼ 白のお道を

二つのお手々はよくはねる

はねた後からぼん／＼／＼

ピアノのお道は愉快だよ

はねるよ／＼黒いお道を

十のお指はよくはねる

はねた後からポーン／＼なる

黒いお道は一寸細い。

佳作 お窓の雨

伊藤逸子

雨の子供が落ちてくる

大勢一しよに落ちてくる

高い空から落ちてくる

お窓にあたつてころ／＼／＼

硝子をすべつてころ／＼／＼

友達集めてころ／＼／＼

雨の子降れ／＼可愛いな

# 幼児の母



昭和十五年  
十月

## 新體制

國民生活の新體制が組織せられる今日です。これは、我國が此の重大な時局に對する、必須の覺悟、必然の意氣から起つたものです。

今までも時局はよく認識してゐました。その生活態度もきまつてゐました。たゞ、それが一人々々の心の中にあり、一人々々の決意としてあらはれたので、全國民が一つ生活の形に一致し、動員される組織にはなつてゐませんでした。それが、しつかりした形にひきしまるのが新體制です。

その新體制のもとには家庭生活です。家

庭の生活が、引きしまつて來なければ、國の生活も、引きしまりません。その意味で、折角の新體制を、ほんたうに内部から充備させるのは、家庭生活の主任者であるお母さんの力だといつていゝです。

新體制下では、子ども、新體制に向かつて教育せられなければなりません。しかも、それは、一つ〳〵の家庭生活が、先づ新體制の精神に合致し、新體制の組織に結びつかなくては出來ないことです。國の爲にも新らしく大事な時です。我子の爲にも大事な時です。

## 母のこよみ

### 秋晴れ

いゝ秋晴れが來ました。子どもといつしよに、野山を歩きませう。春のやわらかい空氣は、ぶら〳〵と歩くによく、秋のひきしめるやうな空氣は、ぐん〳〵力強く歩くにいい。歩きませう。歩きませう。

なにも、特別の名所でなくいいでせう。空氣さへよければ、日光さへ充分なら、畠道でも、林の中でも、つゞいてゐる丘でも、ぐん〳〵歩けるところなら、どこでもいいでせう。町の中のごれた空氣をすつかり吐き出して、きれいな空氣を胸一ぱい吸へるところなら、おなかをすつかり空にして、大きいおむすびを腹一ぱいたべられるところなら、朗かな聲で、力一ぱい進軍歌のうたへるところなら。



# 幼稚園でしてゐるこご (四)

—おはなし—

倉橋 惣三

「先生は、おはなしがお上手だつて、子どもが、いつも喜んで居ります」

「あら、お聴しい。お上手なんて……」

「子どもが始終歸つてから、おはなしをして聞かせます」

「よく覚えてゐらつしやいますのね」

「折角していただくのでございますも」

「お宅のお子さんは特別おはなしがお好きで」

「覚えるのがよろしいのでございませう」

「是非覚えていたゞかなければいけないといふ譯ではありませんが」

「さようなんでございますか」

「學科といふ譯でもありませんし」

「では……」

「話の中のことを感じていたゞきたいのです」

「よく理解して」

「それは、ながくむづかしいでせうし、理解よりも、もつと感じて」

「幼稚園のおはなしは教訓が多いのでございませうね」

「さうでもありませんまい。修身の時間やありませんしね。教訓も含まれてゐるに相違ありませんが、それよりも」

「それよりも……」

「そうね、なんと申しませうか、まあ言つて見れば味でせうか……」

## 季節の御馳走

榮養研究所 佐々木理喜子

國策に副つて代用食や混食を召上る時の御參考に今月の獻立を作りました。第一のは米の量を13位減少して馬鈴薯を混ぜ、第二は米食をやめてメリケン粉だけにしました。取合せる材料に注意して榮養價の充分ある様に、不足勝なビタミンBは大豆や其の他の豆で補ひませう。一と二は主副合計の榮養量で標準量は、蛋白質一三・八瓦、溫量三六六カロリーです。

(一)まぜ飯(馬鈴薯入り)

材料 米五〇瓦、馬鈴薯四〇瓦、秋刀魚二〇瓦、人參二〇瓦、牛蒡四〇瓦、大豆五瓦、以上で蛋白質一三瓦、溫量三七〇カロリー

作り方 大豆は前日から水に浸し軟けて釜に浸汁ごと入れ一度煮立て、次に米と、皮を剥りて賽目に切つた馬鈴薯を入れ水加減をして御飯を炊きます。人參は織切り、牛蒡は小さく笹缺き軟く煮て、

「へえ」

「おはなしはお子さんには、たゞのもの、やうなものですからね。それもお菓子の子やうな。榮養がほしいのは勿論ですが、よく味はふのでなければ……」

「甘いおはなし、からいおはなし」

「味といふと、そういふことになりませんが、つまり、その中の教訓や知識だけでなく、それをそれとして、心の中に取り入れなくては……」

「呑み込みよく」

「呑み込んで仕舞つては、まる呑みになり、う呑みになりますかね」

「口の中で噛み又しやぶつて」

「まあ兎に角く、分るばかりでなく、味として心の中へ受取るのですね」

「幼稚園で、おはなしを何故あんなに大切なことになさるのですか」

「子どもが求めるからですよ。求めながら自分でも分らない心持ちを、おはなしで満足させてやるのです。教へるとかさえずとか、こつちで與へるといふよりも、子どもに心になつて心を充たしてやるの

です」

「もう少しよくおつしやつて下さい」

「たゞへばです。力持ちの話をします。子どもが力持ちになりたがつてゐる心を、そうだ、そうなりたいたのだ。自分が、そうなつてゐるような氣がするよと、たらふく満足させるのです」

「子どもが、おはなしを大好きなものそのためですのね」

「そうですね」

「狐を求める子に狐の話、お猿を求める子にお猿の話……」

「狐を求めるなんてことありませんよ。狐なり猿なり、それは肝心なことぢやなくつて、そこに動くいろ／＼の心持を求めてゐるのです」

「なるほど」

「子どもは、いろ／＼の心持ちをもつてゐますが、實際の生活の中で體驗實感することはむづかしい。そこで、おはなしの中で、體驗してよろこぶのです。又その意味で、教育もされるのです」

「私も、うちでもそうしてやりたい

砂糖、鹽、醬油で薄味に煮ます。秋刀魚は兩身を下し小さく切つて此の中に入れて煮ます。御飯を移す時によく混ぜます。

(二)すいとん

材料 メリケン粉六〇瓦、南瓜五〇瓦、油揚げ八、豚肉二〇、青菜一〇、油四瓦、以上で蛋白質一四瓦、温量三四四カロリー

作り方 煮出汁を作り、野菜を入れて軟くし、豚肉は後で加へます。メリケン粉は水でこねると硬くなりますので熱い湯を用ひます。又上新粉を少量混入しても軟くなります。黄粉がございましたら粉に少し混ぜて下さい。これはビタミンBと蛋白質を補ひます。

(三)うどんのトマトソース和へ

材料 うどんの玉四〇瓦、玉葱二〇瓦、人参一〇瓦、鯖四〇瓦、油少々、トマトソース二〇瓦、以上で蛋白質八四瓦、温量一〇八カロリー

作り方 うどんは一寸位に短く切り油でざつと炒め鹽味にします。玉葱、人参は繊維切りにし、鯖は賽目に切り、いづれも軟く煮てうどんの上のせ、トマトソースは砂糖、鹽で味を作り、其の上にかけます。

のですが、下手で」

「下手とか、上手とか、そんなこといりませんよ。幼い子へのおはなしは、ごくらくくと、技巧なんか使はないのが却つてよろしいのですから」

「でも、幼稚園では皆を集めて、先生はお立ちになつて」

「いやですよ奥さん。そんな公會堂のおはなし大會のやうなこと」

「さうですか」

「藤棚の下でも、お庭の隅でも、二人でも三人でも。私達も椅子にらくに腰をかけて、お宅の椽側か、お居間の火鉢のそばかなんかのやうに」

「それで子どもは謹聴して」

「ハ、ハ、。謹聴なんて。お説教ぢやありませんし。子どもらくらくいろ／＼のことを申しますよ。なかには、途中から話をとつて仕舞ふこともある位で」

「そうすると、おはなしよりも話しあひですね」

「そうですね。その方が、ほんのお話ぢやありませんか」

「それでよろしいのでせうか」

「よろしいどころか、そうして、子どもと語る譯なんです」

「どこかで出てゐる童話の雑誌の名のやうですね」

「あれは、私の發案でつけた名なんです」

「聴かせる許りでなく、言はせもし、聴いてやりもするのですね」

「さうそ。その通り。しかも、その言はせかたが中々むづがしいのです。聴いてやることこそ、尙更むづがしいのです」

子どもと同じ心持になつてね」

「先生がそれをして下さるのですね。私もでは面倒くさくて、つい、うるさくなつて」

「それでもないでせう。可愛い、お子さんのなさるお話ですもの、お母さまこそ、にこ／＼して聴いてお上げになれるのでせう」

「それは、まあ、そうですねえ」

「それを、大勢のお子さんにして上げるのが、幼稚園なんです。一つに集めて、こつちの言ふ話ばかり聴かせてゐるのではありません」

「有り難いことですね」

「なあに、だから、私達も楽しいのです」

## お話のたね本

お話はしてやりたし、知つてるお話は少ない。これがお母さま方の頭痛のたねです。幸この頃は、その材料を集めたたい本が澤山出てゐますが、多くは小學校以上の子どもの爲のもので、幼児向きのものは、別にさがさなければなりません。次の二つは、本會の編纂で、少々自家廣告のやうですが、専ら幼稚園の幼児のために適當なお話ばかり集めてあるところに、安心してお使ひになれる便利があります。

### ○幼児に聴かせるお話

定價金參圓八拾錢。郵稅拾四錢

### ○幼兒の樂しむお話

定價金貳圓八拾錢。郵稅拾四錢

兩方とも、日本幼稚園協會編で、東京日本橋區大傳馬町内田老鶴園發行です。

# ハイデ

(第二十八回)

津田芳雄譯

時々山風が吹きわたるのミ、日なたで羽蟲がぶんぶん唸るのミ、落葉松の枝で楽しさうにうたふ小鳥の聲の外は、何の物音も聞えなかつた。ゼーゼマン氏はしばらく立ち止まつて、汗ばんだ顔を涼しいアルプスの山風になぶらせてゐた。するミ、向ふ側の坂道を誰かが駆け下りて來た。それは電報を持つたペーテルだつた。ゼーゼマン氏は早速手招きした。ペーテルはもじもじしながら、まるで片足がびつこでもあるやうに、蟹みたいな横あるきで、のろのろミやつて來た。

「早く來てくれ給へ。——この道を登つて行けば、おぢいさんミ、ハイデイミいふ子供の住んでゐる、それから、今フランクフルトからお客様の來てゐる、小屋へ、行けるかね。」

あつミ低く叫んだかミ思ふミ、ペーテルは一目散に逃げて行つてしまつた。あんまり慌てふためいたので、丁度あの寢椅子ミ同じやうな格好で二三度さんぼ返りを打つて、それからころころミ坂道を轉がり落ちた。幸ひ寢椅子のやうに粉みぢんになるこミだけは助かつたが、電報が身代りになつて災難を引き受け、粉々に裂けて飛び散つた。「山の人間つて、なんておつそろしく臆病者なんだらう！」

ゼーゼマン氏は、あの世間ずれぬ山の子供があんなに仰天したのは、急に見知らぬ旅人に出會つたからだミばかり思ひ込んだのである。しばらく呆然ミ、ものすごい勢で轉がり落ちて行くペーテルの後姿を見送つてから、ゼーゼマン氏は又登り

はじめた。

ペーテルは、一生懸命に踏み止まらうとしたけれど、さうしても足が滑つて、なほも小つびざくさんぽ返りを打ちながら、さこまでも轉がつて行つた。

それでも、こんな痛さや恐ろしさなどはまだましな方で、いよいよフラシクフルトからお巡りさんがやつて来たのださいふここの方が、すつこすつこペーテルには怖かつた。さつき道を訊いたあの旅人こそ、てつきりお巡りさんださ、ペーテルは思ひ込んだのである。デルフリ村近くの一等おしまひの坂道まで轉がつて来た時、ペーテルはしげみに引つかかり、やつこのここで踏み止まるここが出来た。でもしばらくは寝ころがつたまま、氣をしづめて、さうすればよいかを考へてゐた。

「いよう、又こんなものが降つて来たぞ！」ペーテルの耳もさで、誰かの聲がした。

「この調子ださ、明日は一體、何を押し出してよこす氣なんだらう。まるで縫ひ目のぞんざいな袋から、ちやがいをでも押し出すみたいださ。」

バン屋がげらげら笑つてゐるのだつた。一日の暑い仕事を終へて、一息入れようさ、その邊をぶ

らぶらしてゐるさ、ペーテルがこの間の寝椅子こそつくりの格好で、ころころ轉がり落ちて来たので、面白がつて見物してゐたのである。これを聞くさ、ペーテルは又こわくなつて、後をも見ずに一散に駆け出した。

「押し出す」なんて、それではあのバン屋は、自分が寝椅子を押し轉がしたのを、見てゐたのだからか。今は何よりも家へ歸つて、寢床にもぐり込んで隠れてゐたかつたけれど、山羊たちが山の上におきつ放しにしてあるので、おぢいさんに叱られるのが怖さに、さうしてももう一度山へ引き返さねばならなかつた。心配さ痛さで、今は走る元氣もなく、びつこを引き引き、泣きながらのろろ山をのぼつて行つた。

ペーテルに逢つてから間もなく、ゼーゼマン氏は坂の途中の目じるしの小屋の前を通つた。それで、道を間違へてゐないここが確かになつたので、又元氣が出て、なほもけはしい長い道のりを登つて行くさ、やつこのここで、目ざすおぢいさんの小屋が見え出した。鬱蒼さ繁つた樅の梢が、屋根の上でさやめいてゐた。

ゼーゼマン氏はもうほんの僅か険しい山道のを

ほれば、可愛い娘に會へるのだと思ひ、そのびつくりする様を思ひ描いて悦んでゐた。ところが、山の上では、子供たちは早くもその姿を見付けて、こちららはこちらで思ひもかけぬ不意打ちをしてあげようぞ、待ち構へてゐたのだつた。

ゼーゼマン氏が小屋の前の空地へ一歩足を踏み入れるや、二人の子供が歩いて來た。一人は背の高い、金髪にバラ色の頬をした女の子で、まつ黒な腫でにこにこ笑つてゐるハイディによりかゝつてゐた。ゼーゼマン氏はそれをぢつと見つめてゐたが、急に立ち止まるまゝ、涙がこみ上げて來た。一體これはどういふことだ。その金髪の華奢な色白の美しい娘は、亡くなつたクララのお母様と生きた寫しではないか。ゼーゼマン氏は、まつたく夢か現かわからなくなつてしまつた。

「お父さま、あたしがわからなくなつて？」

クララはうれしさうに顔を輝かせながら云つた。

「あたし、そんなに變つて？」

「變つたまゝも、すっかり變つたねえ。さうしてこんなにも變れたんだらう。一體これはほんたうなんだらうか？」

今度は後退りして娘の全身をうれしさうに打ち眺め、目の前からかき消える幻などではないことを確かめるやうに、

「これがクララなのかい？ ほんたうに、うちの小つちやなクララなのかい？」

ま、幾度も幾度もくりかへしてゐた。

おばあさまが、息子の喜ぶ顔を見に出て來た。

「さうですね。あなたがわたしたちを不意に喜ばせにやつて來て下さつたのにも驚いたけれど、不意打ちくらべなら、こちらに敵はないでせう」

それからしみじみと挨拶をかはし、

「さちかく、わたしたちの第一の恩人の、アルムをぢさんに御挨拶なさい」

「さうでしたね、それから、うちのかあい、ハイディちゃんにも」

そしてハイディと握手しながら、

「さうだね、山のおうちへ歸つて、うれしいかね。いや訊くには及ばないね、アルプスのバラより、まだうれしさうな元氣な顔をしてるぢやないか。ほんたうに、その元氣さうな顔を見せてくれて、なによりもうれしい」

ハイディもうれしさうにゼーゼマン氏のやさし

い顔を見上げた。ほんたうに、いつも親切にして下さつたゼーゼマン氏が、山の上に待ちかまへてゐた。何ものにもまさるこの大きな歡びに浸つてゐるのを見るに、ハイディは自分までうれしくなつて、心が波打つのだつた。

おばあさまは息子をおぢいさんに引き合はせ、二人が挨拶をしてゐる間、椈の木をもう一度眺めようよ、裏の方へぶら／＼出て行つた。するさここにも、思ひがけないものが待つてゐた。椈の木蔭に、濃い空色のりんどうのすばらしい花束が、まるでそこに生えてゐるやうに生き生きと、日に輝いてゐるのだつた。

「なんてきれいなんでせう。まあ可愛らしいこと！」

おばあさまはうつこりを見惚れた。

「ハイディちゃん、ちよつと来てごらん。あなたでせう、こんな美しいお花でわたしを喜ばせようとしてくれたのは。ほんきに、なんてきれいなんでせうねえ」

子供たちは走つて來た。

「いゝえ、わたしぢやないんです。でも、誰だか知つてますわ」

「お山の上にはね、おばあさま、こんなのが、この通りの格好で、きつさり咲いてゐよ。もつときれいだわ。誰が摘んで來たか、當てゝごらんさない」

クララがあんまり愉たのしさに云ふので、おばあさまはも少しで、クララぢやないかしらと思ひ込むところだつた。でも、いくら何でも、そんなことはある筈がない――

丁度この時、椈の木のうしろで、かさこそ小さな音がした。こつそりき降りて來たペーテルだつた。小屋の前でおぢいさんき話をしてゐる人が誰だか、遠くからでもすぐわかつたので、まはり道をして、こつそりき見付からぬやうに抜けて歸らうとしてゐるのだつた。けれどもおばあさまは目ざきくそれを見付け、急に、ああ、お花を摘んで來てくれたのは、きつとあの子なのだ、羞づかしがつて逃げて歸らうとしてゐるのらしいから、呼んで御褒美をやらなくてはと思ひ、

「こちらへいらつしやい、こわがることはありませんよ」

と呼びかけた。

# 國民學校と國民幼稚園

(二)

— 文部省講習會講述速記 —

倉橋惣三

## 講義要項

- 一、國民學校教育の精  
國民普通教育の改革——教育審議會の答申——國民學校教育の本旨——「皇國ノ道ニ則リテ普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的練成ヲ爲スコト」
- 二、國民學校の教育方針と教科  
國民學校の教育の目的の主眼點——國民學校の教育の方法の強調點——國民學校の教科
- 三、國民學校と幼稚園  
教育審議會の答申——小學校と幼稚園との從來の關係——幼稚園の國民教育上の位置
- 四、幼稚園の史的考察  
フレイベルの幼稚園——我國に於ける幼稚園——人文的、心理的、社會的——幼稚園の國民教育性——國民幼稚園
- 五、幼稚園と低學年との聯絡  
從來の問題の検討——從來の低學年と新低學年——教科の統合——綜合教授の問題
- 六、幼兒保育者としての國民學校教科の研究  
國民學校教科の教授要旨——國民科——理數科——體練科——藝能科——實業科
- 七、我國幼稚園の將來  
幼稚園の國民教育的充實——幼稚園の國民教育的普及——國民幼稚園の非階級性と多様性
- 八、幼兒保育者の責務と自重  
幼兒保育者の責務——幼兒保育の目的内容と幼兒保育方法の特質——幼稚園と家庭——幼稚園保姆の向上と養成——幼稚園保育者の自重



## 二 國民學校の教育方針と教科

### (一) 國民學校の教育の目的の主眼點

昨日申上げましたやうな工合に、今回我國の教育といふものが殆んど根本的に改めらるゝのでありますが、従つて幼稚園もまたその改革に伴はなければならないのであります。殊に幼稚園に極く近いところの國民學校、即ち初等普通教育が既に明年から改正の形に於て實行されることに決つて居るのでありますから、それを基にして幼稚園のこゝを考へなければならぬ必要に迫られて居るのであります。そこで今日はその國民學校の教育方針が一體さういふ風になつて居るのかといふこゝを見たいと思ふのであります。それにつきましては昨日もいろ／＼申上げました通り、まだ國民學校令或は國民學校令施行規則といふものが正式な形で發布されて居りませんから、嚴密に言へばさういふものによつて考へますほど正確な譯に行かん譯でありますが、大體に於きまして斯ういふやうなものになるであらうといふ教則案といふものが出て居りますから、それによつて考へて行くことに致さうと思ふのであります。

國民學校の教育方針を二つの方面から考へまして、先づ目的の方から眺めて見ます。國民學校の目的がさういふ點に於て特色を持つて居るか、さういふ點に於てその方針の重要點が置かれてあるか、といふこゝを見ようと思ふのであります。

これは國民學校令施行規則といふものが出ましたならば、多分その初めに置かれることであらうと思はれます。即ち昨日こゝへ書きました「皇國ノ道ニ則リテ云々」といふ言葉は、國民學校令第一條に多分相當するものであらうと思ふのであります。その目的の諸要件は大體三つの項目に分れて居ります。

- 一、教育ノ全般ニ互リテ皇國ノ道ヲ修練セシメ特ニ國體ニ對スル信念ヲ深カラシムベシ。
- 二、國民生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ體得セシメ情操ヲ醇化シ健全ナル身體ノ育成ニカムベシ。
- 三、我國文化ノ特質ヲ明ナラシムルト共ニ東亞及ビ世界ノ大勢ニツキテ知ラシメ皇國ノ地位ト使命トノ自覺ニ導クベシ。

この三つの項目が國民學校の教育方針の中で目的方面に於て重要な點と示されて居るのであります。

申すまでもなく國民學校は教育の下の方さいふよりも、國民教育の基本になつて居るものでありますから、従つてその國民教育の基本のところで大切とされて居りますことは、即ちその上にある總ての教育に於ても大切と考へらるゝ點であります。また國民學校のところで大事なことをだま考へられて居りますことは、學齡に達して突然さういふことが注意さるべき筈のものでなく、就學前からさういふ方針で考へられて居なければならぬ筈であります。これが昨日申上げました點と關係して來る。即ち若しも教育學説とか、個人の教育の意見とかで變つて來ますことならば、問題は或は國民學校といふところだけに限つての問題となることありませう。併しこの改造の根本理由が日本の國そのものゝ自覺に基いて居るといふことでありませうならば、學校がさういふ方針を採つて教育するだけでなく、學校にあらざる場合に於きまして、國民が教育さるゝ總ての場合の方針でなければならぬのであります。更に詳しく言へば家庭教育もまたこの方針に重要點を置いて日本の子供としての我が子の教育をして行かなければならぬのであります。況んや國家の教育制度の中に置かれてあります幼稚園の場合に於きましては、實に全く同じ方針でやつて行かなければならぬことは申すまでもないのであります。唯一寸こゝで、後で考へることを先廻りして申して置きますならば、今こゝで考へてゐるのは目的でありまして、方法としては子供の年齢により、或は教育施設の形態により、いろ／＼變つて參りませう。目的が即ちそのまゝ方法といふ譯ではありません。併しながら、目的は教育者の信念の中にあることでありまして、その意味に於きましては中等學校の先生も、國民學校の先生も幼稚園の先生も、大體共通なる方針の下にやつて行くといふことは當り前でありませう。この目的は國民學校といふところに於て適切なる書き著はし方をしてありますから、その書き現はし方は、幼稚園の保育にびつたり合ふかぎうか判りませう。判りませうが、斯うした目的方針に於きましては變らないのであり、少くも幼稚園の先生は、やがて學校でこの方針で教育せられて行く子供を、その就學前に於て預つて居るといふ確固たる態度がなければならぬと申し得ると思ふのであります。國家が國民學校に於て日本の子供を斯ういふ方針で教育しようとして居る。當然それに向つて進むべき子供を、その前の段階に於て、方針が萬一違つて居りましたならば、その幼稚園は國家の教育の方針に反するものと言はれても仕方ありません。勿論教育の目的が充分に強く、はつきり實現して徹底して參りますのは、だん／＼上のことでありまして、幼稚園といふやうなところでは、先生がどんなにしっかりと目的を持つて居られまして、それが中等學校や、或は國民學校の上級に於て現はるゝ如くはつきり徹底し難いものであることは申す

までもありません。従つて幼稚園に於て、この目的が直ぐあらはに、目に見えるやうに徹底するかどうか、これはまた靜に考ふべき問題であります。併しながら、その徹底がはつきり確實に行かなくとも、或はもつこ言葉を變へて申しますれば、徹底がはつきりした形にならなければならぬ。方針がしつかり同一方向に向つて居るこいふこが一層大事なのであります。若しも形がはつきり出るのでありますならば、極端に言へば、その形だけまごまりがつきまへすればいゝこいふやうな淺いこで済む場合もあるかも知れません。附屬刃で済むこがあるかも知れません。併しながら、今徹底した形には現はれないけれ共、その方針に於ては確實にその方向に向つて居るこいふこであれば、この方針の向けごころこそが、それこそより重大であり、また實に教育者自身に餘程しつかり把持されて居なければならんと思ふのであります。

以下三要點を一つ／＼考へてゆきませう。

(イ)「皇國ノ道ヲ修練セシム」國民學校教育本旨の一番初めに出て参ります言葉が「皇國ノ道」であり、目的方針を決める時にまた當然この言葉が出て來るのであります。その「皇國ノ道」は何んぞやと言へば、教育に關する勅語に示されてある道に他なりません。そこで從來も雖も我國の教育はあの御勅語の御趣旨に基いて行はれたのであります。今度はそれを更に強く強調して居る譯であります。明確に言ひ現はして居る譯であります。教育の實際に於て、さう考へられて居るに止まらずして、國が示す教育の方針に於て、はつきりした言葉を以てそれを書き現はして居るのであります。

(ロ)「特ニ國體ニ對スル信念ヲ深カラシムベシ」この「國體ニ對スル信念」これも從來重んじたこであります。しかしただ理解するこいふだけでなく、確固たる信念となり、それも動搖するやうな淺いものでなく、充分深いものでなければならぬこを強調したのであります。信念こいふ言葉は實に強い響をもつてゐるではありませんか。

(ハ)「國民生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ體得セシム情操ヲ醇化シ健全ナル身體ノ育成ニカムベシ」

これ亦從來の小學校に於てもやつて居つたこであります。唯こゝで氣をつけなければなりませんこは、從來の小學校令では「生活ニ必須ナル」こいふ言葉が使つてありまして、特に「國民生活ニ必須ナル」こいふ言葉は使つてなかつたのであります。「國民生活」こいふ言葉が使つてなくとも日本人の生活は「國民生活」に他ならんに相違ないのであります。特に「國民」こいふ字を使つた場合こ使はない場合こにけじめをつけて考へて見るこしますれば、その言葉のついて居る場合には、あらゆる生活に於て國民意識、國民としての立場が入つて居るこを意味します。それこ比べて單に「生活ニ必

須ナル」と言つた時には、個人生活に必須なるいふやうな意味にならんことも限りません。即ち「國民生活」いふ字が加はつて居りますことに於きまして大變に違つて居るご見られるのであります。元來、從來の普通教育も、ずつと奥へ入つて考へますれば決してさういふ譯ではないごも思ひますけれ共、聊か個人本位的であつたごいふことは、普通教育を特に一層國民的に考へようごいふ立場からは何んごもなく物足らなく思はれるのであります。勿論個人本位的ご申しまして、苟も國家の普通教育が個人主義を養はうごして居つたなごでは決してありません。ありませんが、斯ういふ考へ方は或はあつたかも知れません。ごいふのは個人を先づ個人ごして教育し、個人ごして完成し、それによつて國民ごしての任務を充分に盡さしめ、さういふ人間の寄り集まりに於て國民的教育を大成しようごいふ、斯ういふ順序で考へたかも知れませんが、個人ごして先づ生きる。個人ごして先づ正しい。個人ごして先づしつかりして居る。斯ういふごきを何處までも先にすべきごこち考へました。その出來上つた個人が國民ごしての義務を忘れず、國民ごしての自覺を強く持ち、さういふ人が集まつて國民的生活を大成する。斯ういふ順序であります。これは所謂利己主義ごかごいふやうなごこちやありませんけれ共、教育の性質ごしては先づ人間を一人々々の個人ごして見て居る。太郎ごいふ個人、人類中の一人だけご考へて見て居る。その一人ごしての太郎が完成して行き、國民ごなり、よき國民生活を大成するご、斯う考へるのであります。それに對して今度の考へ方は、それではいかんごいふ。少くもそれでは足りないごいふ。太郎を見ればいきなり太郎ご見る前に國民ご見るのであります。國民ご見る。太郎が知識を持つのは國民ごして知識を持つべきだご考へる。太郎を大事にするのは勿論國民ごして大事にするご考へるのであります。そして國民生活ごいふ意味で總ての生活が指導されて行く場合ご、お前の生活ごいふ意味で指導される場合ご、その結果に於て違つて來るのは申すまでもないのであります。國民學校が敢て「國民生活」ごいふ字を使つて居りますのはさういふ意味があるご思ふのであります。

(二)「我國文化ノ特質ヲ明ナラシムルト共ニ東亞及世界ノ大勢ニツキテ知ラシメ皇國ノ地位ト使命トノ自覺ニ導クベシ」これは愈々幼稚園では難しいごこちになります。「我國文化ノ特質」東亞及ビ世界ノ大勢」これはまア實に大變なごこちであります。併しながら國民教育ごしてはさうしてもさうでなければなりません。「皇國ノ地位ト使命トノ自覺ニ導ク」ごいふごこち、導き終るごこちは出來ないごとしても、そつちへ向けて行くごいふ考は是非立てなければならぬごいふのであります。

以上、目的の三要項は、畢り申して見ますならば、教育が、個人的な性質から何處までも國民的な性質になつて居るこゝろが中心をなしてゐるのであります。

## (二) 國民學校の教育の方法の強調點

次に國民學校教育方針の方法に關する強調點を考へて見たいと思ひます。今迄申しましたのは目的であります。目的はやゝ遙かなる向ふを考へるやうなこゝろもあつたのでありますけれども、方法といふこゝろになりますといふは、極く教育の實際のこゝろになります。その方法の強調點は澤山ありますが、

(一) 先づ第一は「心身一體トシテ教育シ教授・訓練・養護ノ分離ヲ避クベシ」といふのであります。これは從來の小學校に於きましても、所謂教育に新學理を基礎とします限り、だん／＼に考へられ來つたこゝろであります。併しながら、多くはまだ古い傾向が残つて居りまして、教授・訓練・養護、主として知識を對象とする教授、主として徳性を對象とする訓練、主として身體を對象とする養護、この三つが如何にもそれ／＼別個のこゝろのやうに行はるゝ弊害がまだあつたのであります。こゝろで、その三つの作用を、きれ／＼別々に考へる誤謬は、いろんな理由によつて起り來るのであります。その一番原理的な根本は、人間の心と身體とを分けて考へるこゝろに出發して居ります。このこゝろを申上げますと皆様は直ぐにお考へになると思ひます。幼稚園では昔はいざ知らず、近年ではちやん／＼その通りやつて居る。我々の幼稚園に於て教授・訓練を別個に分けて行ふなんてこゝろは決して居ない。それを理論化して見れば身體の保育、心の保育、そんな分けた扱ひはして居ない。斯う皆さんはお考へになりませう。私も幼稚園がさういふ風でなければならんといふこゝろにつきまして、いろ／＼の方面から強調し來つた。殊に心身一如といふやうな難しい言葉を借りました。この問題を前から考へ來つたのであります。併しながらその時に斯ういふ考へ方をお互ひにして居つたと思ひます。その一つは何が故に幼稚園は教授・訓練・養護の分離の形を避け心身一如の保育態度を探らなければならんか、といふこゝろを、幼児年齢の生活特質に基いて考へるのです。彼等の生活が未だ充分に分化して居ない。即ち未分化の状態にある。それを知能的、道徳的、體育的の三分化として取扱ふこゝろが不合理だといふのであります。即ち専ら幼年期の生活心理に基いて、それを強調してゐる譯です。そして、今日もまたその點に於て變りはありません。幼年期の未分化の時期に向つて分化的教育方法で

取扱ふさいふこは、これは理論的に不合理であります。それからもう一つの次の考へ方は、従つて——従つてご申しますのは幼年期の生活特質に基いてさういふこが主張されるのであるから——幼年期でない、小學校に入つたならばさういふ風に分れた教育がせられていゝであらうが、幼稚園のころではまだ分けまい。斯う言つたやうな考へ方であります。さういふこを誰も格別にはつきり言ひはしません、今から振り返つて見ればさういふこが思はれないでもありません。ところが、今度の國民學校は、所謂幼年期ならざる少年期の教育に於きまして、心身を一體として考へよ、教授、訓練・養護を分離しないやうにせよ、斯う言つて居るのであります。即ち國民學校教育方法上のこの特質は幼稚園が今まで幼年期なるが故に言つて居つた心理的理論根據とは違つて居ります。少年期でありますから幼年期に比べれば多少分化し得る時であります。しかも國民學校は心身一體、分離せざる教育方法によるべしと言つて居る。これは何故さう言つて居るかさいふこは暫く措きまして、斯ういふこが幼稚園だけの問題でなくなつて來たさいふこも先づはつきり見られるのであります。言つてみれば初等教育が、今まで幼稚園が言つて居りましたと同じやうな形體に於て、その方法を採らうとして居るのであります。さうしますと——後でまたもう少し詳しくそこを言ひたいと思つて居りますが——幼稚園だから、未分化でなければならぬから、そうやつて居つた。總ては直きにそれが分れて行くのだけれども、今は分化せずによくさいふの違ひ、國民學校に行つても心身一體の取扱ひを受け、教授・訓練・養護不分離の取扱ひを受けるのであるから、幼児期からもその同一方針で保育して行くさいふ意味が加はり來るのであります。若し將來——これも後でくりかへし言ひたいこでありますが——幼稚園に於て心身を區別し、教授・訓練・養護を分離せしめた取扱ひをする人があるさしますならば、今までなら、その人が幼児の心理特質に無理解であるさいふこで攻撃しました。然しこれからは、それと共に、その子供が今に國民學校で受けるであらう教育形態を貴君は知らんのか、ご攻撃せざるを得なくなる譯合であります。實にこの一箇條、果して施行規則の中にさういふ名文になつて現れるか知りませんが、多分根本に於てこれは變るまいと思ひます。極めて重要な問題であります。

(ロ)次に第二、「各教科並科目ハ其ノ特色ヲ發揮セシムルト共ニ相互ノ關聯ヲ緊密ナラシメ之ヲ國民練成ノ一途ニ歸セシムベシ」これがまた大變に注意を要する問題であります。二つの點で注意を要すると思ひます。一つは、この「教科並科目」さいふこは後で説明致しますが、要するに國民學校のいろ／＼の學科目であります。その一つ一つの學科の特質

を發揮させることの必要は勿論であるが、互ひの關聯を密接緊密になさしめなければいかんといふのです。これは皆さんに最も手近い言葉を使つて申しますれば、従來は、幼稚園に於てさへも、保育項目が互ひの關係の緊密を缺いて居つた時代がありました。教科にあらすして保育項目に於ての場合でさへも、その互ひの關係の緊密を缺いて居つたことがありましたが、今日ではこれを如何にして緊密ならしめるかといふことについて非常に努力し來り居るのであります。そのためを試みにいろいろな保育法案が提出されてゐたりします。それと同じく、國民學校に於て各科の緊密なる關聯といふことが實に大事な問題にされたのです。その初めに「各教科並科目ハ其ノ特色ヲ發揮セシムル」を書いてありますが、その狙ひ所は、この各科目の關聯にあるのであります。併しもつゝ大事な點は、關聯を緊密ならしめることは従來はそれを教授法上の問題として考へました。或は子供の知識の生活化といふやうなことでたかゞ考へました。併し今度はそうでなく、斯うすることによつてのみ國民鍊成が出来るといふところに主眼點があるのであります。小學校で算術だけ得意な子供が出來ても足りないといふのであります。圖畫だけうまい子供が出來たつて足りないといふのであります。それも、従來は、そんなことだけで、眞の生活が出来るやうに教育されなくてはいかんと言つて居りましたのを、今度はもう一つ進んで、それが國民としての價値を増す所にならなければならんといふのです。國民學校でいろいろの學科を習ひます。大體今の學科さう變らないのであります。例へば——後で少し變つた言葉で申しますが、こゝでは従來の小學校に結びつけて申しますれば——數學が出来るといふことは、その個人の頭が良くなるといふことだけに止まらずして、さうでなければ國民鍊成が出來ないからいけないといふのです。圖畫が音楽さかでも、それは趣味を養ふといふことが前の考へ方でありましたが、今度は國民鍊成して缺くべからざる要件として考へて居るのであります。そこで學科々々に基く小さな専門的能力を養ふのでなく、國民鍊成の大本に向つて一途に歸着させなければいかぬを、斯ういふのであります。ですから形は従來考へて居りましたやうなことでありましたが、何が故にさういふことをするかといふ根本理念に於きまして、非常に變つて來て居るのであります。

この外、いろいろのことがありますが、最も大事な點はその點であります。それに併せて、この教科科目の問題を申しますと、もう少しそこがはつきりして參りますが、一寸こゝで休憩致しませう。

### (三) 國民學校の教科

前に教育方法の問題の中で教科科目といふ言葉を出しましたが、これは今度の國民學校の特質を知るに最も大事な一つの問題であります。今假に現行小學校の教科、あれを暫く頭から取去りまして、來年四月から行はれるところの國民學校の教科内容がさういふものであるかといふことを、一應白紙状態になつて考へることに致しませう。さういふのは、折角持つていらつしやるのに白紙にするのはおかしいのであります。一應白紙に頭を還して下さらん、何んだ從來さ變らんぢやないかといふ心持ちが附纏ふ懸念が非常に多いのであります。見たところ同じやうなことでありまして、その根本の建前が全く違つて居るさういふところが大事な點なのでありますから、その意味をお聴取り願ひます。

(イ)前から申して參つた通り、「皇國ノ道」これが國民學校の初めにして終りなのであります。萬事萬端、あらゆる子供に對して、皇國の道に歸一せしめようといふことからはじめるのであります。「お前は大きくなつて出世して幸福に暮せよ」さういふことから始めるのでありません。「お前は大きくなつて立派な技倆を備へて偉い人になれよ」さういふのではありません。「お前は大きくなつて偉い學者になれよ」、そのために學校へ行くさういふ、出發點をそこへ置くのではありません。いつでも、誰れにでも「皇國の道に歸一せしめよ」斯う考へる。従つて教科の科目も皆そこから出て來るのであります。皇國の道に歸一し、皇民として鍊成されるさういふことのためには、さういふことが必要であらうか、そこを先づ考へたのであります。さうしますさういふ、この皇道の道に至らしめるためには、さういふことも必要である。唯國民鍊成國民鍊成と言つて居ても、教へる方も習ふ方も順序が立ちません。學校さういふところは、ちゃん順序立て、立案的にやるさういふところでありませうから、さうしても教科が必要になる。そんな教科が必要になるかと言ひました時に國民學校では五つの教科が必要だ、斯ういふのであります。

第一が國民科、第二が理數科、第三が體鍊科、第四が藝能科、第五が實業科、この五つになつて居るのであります。

これを説明的に言つて見ますならば、國民的鍊成が國民科に於てされることは勿論であります。これは言ふまでもありません。完き國民にしては、理數の教養がなければならん。體鍊が充分にされて居なければならん。藝能が備はつて居なければならん。また實業能力もなくしてはならん。斯ういふことになつて居るのであります。この教科名は新らし



い言葉で、從來の小學校にはない言葉であります。ですから、私共これからお母さん達にもよく呑込んで貰はなければならぬと思ひますが、子供が「今日はねエ、理數科だよ」と言つた時にお母さんがちゃんと言つてくれなければ困る。或は「藝能科だよ」と言つた時に判つてくれなくちやア困るのであります。ところでこの國民科といふ中には、修身、國語、國史、地理といふものが含まれるのであります。理數科といふ中には算數、算術を申して居りません。算數と言つて居ります。及び理科、これが含まれて居ります。それから體鍊科といふ中には體操と武道が含まれて居ります。藝能科の中には、澤山のものが含まれて居りますが、音樂、習字、圖畫、次に新しい言葉でありますが工作、手工をか手技に當るのであります。家事、裁縫、これだけが藝能科に含まれて居ります。實業科といふ中には農業、工業、商業、水産業、これだけが含まれて居ります。

(ロ)そこで先程、皆さんの頭を一應白紙に還して置いて下さいと申しましたのはこのところでありました。この教科といふところでは全く新しい言葉でありますから「成程、違つたなア」といふことがお判りになるが、その教科のそれ々に含まれて居ります修身、國語、國史、地理、算數、理科、體操、武道、習字、音樂、圖畫云々を斯うなります。何んだ矢つ張り今までのあれを變りがないぢやないか」といふことにお考へになり易い。古いことが頭にこびりついて居ります。斯ういふ大きな誤謬が起るのであります。ところで、國民學校の教育は、この下に出て参ります——これを科目と言ひます——各科目を教へる所である。その科目の修身、國語、國史、地理、これを一束に縛つて便宜上國民科を名をつけ、算數と理科を一つに括つて理數科を名をつけ、畢り今まで澤山の科目がすらり並んで居つたのを、その科目の性質に基いてそれ々々束ねたに過ぎないのぢやないか。斯ういふ間違つた考へ方でありました。これは國民學校の教育を理解する上に於て最大の誤謬であり危険なのであります。決してさういふ組合せではないのであります。狙ひ所は一つに「皇國ノ道」これが本體であります。それがもつて、そのためには斯ういふ教科が必要だといふことの方からきめてゆかれます。そしてその教科の中を分ける、いろいろの科目が擧げられるかといふ譯になるのであります。

(ハ)前に、國民學校教育方針の特質の中で、方法上の特質といふ意味からしまして「各教科並科目ハ其ノ特色ヲ發揮セシムルト共ニ相互ノ關聯ヲ緊密ナラシメ之ヲ國民鍊成ノ一途ニ歸セシムベシ」といふことを考へました。勿論國民學校では、國語を教へて居る。修身を教へて居る。音樂を教へて居る。理科を教へて居ると言つて、必ずしも非常な誤謬ではあ

りませんけれ共、正しく國民學校の教育方針を言ひ現さうとする時には、先づ教科を言はなければならんのです。教科を言へばその中に科目が入つて居ることになるのです。少し例が當りませんけれ共、從來の小學校では、例へば理科の中で教材を教授要目といふものがありまして、その要目の中には或は櫻であるとか、蝶々であるとかいろいろなものが出て参るございます。そこで小學校で何を教へて居るかと言へば蝶々を教へて居る。櫻を教へて居ると言つても誤りではない。けれ共、さうは言はなくて理科を教へて居ると言つて居ります。それをもう一段上げて来たと言つて宜しいと思ひます。この科目には要目があります。ありますが、要目を教へるどころでなく、科目を教へるどころでもなく、教科を教へるどころといふところに國民學校の本質があるのです。さうでないで「皇國ノ道」に歸一することは難しいのであります。

算術が國民の道、或は音楽が皇國の道といふことは、少し飛び過ぎて居ります。お互ひには判るのでありますが、教科になるで國民鍊成の條件内容として考へられます。理數、體鍊、藝能、實業といふやうな教養がなくては、「皇國ノ道」を完うすることが出来ないといふことはよく判ることです。これは國民學校に關する知識として充分皆さんに御理解願つて置かなければならん。併し(二)のところでこの講習は何處までも幼稚園を本體として考へて行くといふお約束から、こゝでまた後に申しますことを一寸申して見ますならば、何んぞ國民學校の教育が幼稚園の教育と似た形になり來りしことよ、と斯ういふことが感ぜられるのであります。幼稚園保育に於て教授・訓練・養護を分離しないやう、又心身を一體ならしめるやうにといふことを考へた。小學校に行つたらこれはさうでなくなるのも仕方ありますまいといふやうに考へて居りましたものが、先程申上げました如く、一つになつてしまひました。幼稚園に於ては保育項目の一つ／＼を目的として居るのでなくして、その集まりによつて行はれる生活訓練を目的として居る。その通り科目を教へるどころでなくして、國民科、藝能科、體鍊科、理數科、實業科といふ形に於て教育が行はれる。斯ういふ形になつて居るのであります。

(ホ)こゝで私は斯ういふ二つの感想を申し上げます。一つは今までは幼稚園の特質として考へて居りました問題が國民學校に於て同じ形で行はれ來つて居るのであります。國民學校に於て同じ形に行はれて來たのでありますから國民の教育といふことに於ては國民學校も幼稚園も違はないとしまして、従つて幼稚園でも矢張り斯ういふ精神でやるべきであると思ひまして、その上に幼年期といふ特質が大いにそこに働いて居るといふ譯でありますから、愈々もつて幼稚園保育は我々が豫て、皆様も共に研鑽し來りました如く、分れ／＼離れ／＼の教授的やり方であつてはならんといふことが非常に強くな

つて来るのであります。

更に之れを裏返して申します。若し幼稚園があの保育項目を分けてやつて居たならば、誰かゞ批評して「貴君の幼稚園は幼稚園らしくないね、小學校のやうだねエ」ミ斯う今まで言つて居りました。それが今度からは、さうは言へなくなつて来たのであります。「小學校のやうだねエ」言ふ代りに「國民學校のやうだねエ」言はうミするミ、國民學校はちやんミ非分割でやつて居るのであります。「小學校のやうだねエ」言はれたことに對して今までは寧ろ多少恥ましたミするならば、今度からは「國民學校のやうだねエ」言はれることは恥でないであります。國民學校に於て、斯うした意味に於ての教育に經驗を積まれた方は、幼稚園にいらしつても、今までの小學校の先生が幼稚園に来てさまざいしたことは少し變つて来るのではないかミ考へられるほきであります。幼稚園は幼稚園であゝいふやり方をするミ言つて居つたのに對して、今度は斯う言ひませう。何處までもこの講習會では幼稚園を本體ミして言ひますから變に聞へるか知れませんが國民學校でさへすらも尙あゝやつて居るミ、斯う言ひませう。幼稚園が非常に新しい考に基いて、不分化の教育をやつて居る。斯う自慢して居たのが一寸變つて参りました。國民學校が國家の指導の下にさうなつて来るのであります。分化して居る程度に於ては幼児期より進んで居る少年期に於てすらも、國民教育であるからさうなつて居るのです。そこで幼稚園は——それが國民教育でないのなら別問題ですが、國民教育である限り——一層斯うでなければならんさいふことになつたのであります。これは私達がはつきり感じなければならん問題だと思ひます。

斯ういふ譯であります、大體國民學校のこゝを國民學校ミしてお話致しますのはこゝで打切りますが、始終私は國民學校の御理解を願ふミ同時にお互ひ幼稚園さいふ立場から幼稚園教育に始終思ひを返しつゝ申して参りましたが、まあこの私の刷物による第一ミ第二は國民學校そのものを、さういふやうに御理解願ひたいさいふことであつたのであります。そこで問題が一轉して参りまして、今度の教育刷新これが實現しますのは先づ國民學校であります、幼稚園そのものはさうなつて居るのであらうかさいふ問題であります。

前に申しました如く私達の希望ミしては少くも國民學校ミ一緒に幼稚園さいふものが新しき形に於て改革されるこゝが望ましい。もつミお互ひだけの立場で勝手に言ひますならば、幼稚園の方を先にして貰ひたい位であります。

そこで、實際は國民學校が先になつて居りますが、併し今度の教育刷新の意圖の中に於て、幼稚園はさう取扱はれて居るだらうかといふことが切なる問題になります。このことに就きましたの研究は、時間が参りましたが一寸申上げて終りたいと思ひますが、このことに關する研究は、今私共が國民學校の研究を國民學校教則案といふものに基いて研究致しましたやうな、さういふ據りどころがありません。まだそれが出来て居りませんのです。が、併し、前に申しました今度の刷新の基礎は教育審議會の答申にあるのであります。その教育審議會の第一回の答申は師範學校、國民學校、幼稚園に關する答申をして居るのでありますから、恐らく國民學校教則案が國民學校に關する教育審議會の答申に基いて出来ましたと同じやうな工合に、將來幼稚園に關する保育規則が出来ますならば、これは教育審議會答申の幼稚園に關する方針に基いて出来るものと思へて宜からうと思ふのであります。

そこで權威ある教育審議會は幼稚園をさう取扱つて居るかといふ問題だけをこゝで見たいのであります。その權威ある教育審議會は幼稚園のこゝについて實に重大なる考慮を拂つて居るのであります。その考慮は二つの點に於て現れて居ります。教育審議會の答申が國民學校に關する要綱、師範學校に關する要綱と相並んで幼稚園に關する要綱といふもので出来て居ります。幼稚園に關する要綱といふものがちゃんこ答申されて居るのであります。

將來の幼稚園改造はこの方針に基いて行はれて行く順序のものであります。しかも、その幼稚園に關する要綱といふものは疾くに皆さん御承知のやうに屢々新聞にも出て居りますし、慥か昨年の講習に於きましてそんなことを申上げたかと思ひますが、兎に角、その要綱は皆さん御承知のこゝであります。

しかも私こゝでは非おき、願ひたいことは、幼稚園に關する要綱といふ前に、幼稚園といふものにつきました、大變に大事なことが答申せられてゐるのであります。昭和十三年十二月八日に教育審議會は、その總會の名に於きまして、國民學校、師範學校及び幼稚園に關する答申を出しました。その答申の前書に申しませうか、要綱を擧げます前に總論總説のやうなものが書いてあります。その總説の中に斯ういふことが書いてあるのであります。

「皇國ノ發展ニ備ヘテ就學前ニ於ケル幼兒ノ心身ノ健全ナル發達ヲ圖リ順良ナル性情ヲ涵養シ國民育成ノ素地ヲ培フハ極メテ切要ナリ、之ヲ元ヨリ家庭教育ノ振興ニ俟ツトコロ多シト雖モ時勢ニ伴ヒ家庭ヲ扶ケテ幼兒保育ノ全キヲ期スルノ要愈緊切ナルモノアリ、將來一層幼稚園ノ普及發達ヲ圖ルト共ニソノ内容ノ整備ヲ期スルハ國民基礎教育ノ刷新ト相

俟ツテ刻下樞要ノ時務ナリト言フベシ」

斯ういふことが擧げてあるのであります。この答申の大體は國民學校に關する要綱、師範學校に關する要綱、幼稚園に關する要綱と三つが内容になつて居ります。

さうして幼稚園に關する要綱といふのは大體でありまして、四つばかりの要綱が擧げてあるに過ぎないのであります。然し前書のところでは前書全體の中の何分の一でありませうか、教員養成や國民學校のと同じ位の分量を幼稚園の事に使つてあるのであります。さうして今讀みましたやうな意味に於きまして、こんなに大掛りで國家が國民教育を改造し、皇國の發展に備へて國民學校を造らうとする時に、その前の就學前の子供の問題について充分なる考慮を圖りそこで國民育成の下地を養ふことは極めて切要だと言つて居りますのです。之れ實に幼児教育に對する國家的重要性を認めて居るものと見なければなりません。そして幼稚園といふ施設を普及せしめ、發達せしめ、内容を充實せしめることは、國民學校を造り、國民學校の教師を養成する師範學校を改良すると同じく「國民基礎教育ノ刷新ト相俟ツテ刻下樞要ノ時務デアル」と説いて居るのであります。

即ち私はこの方針に基いて斯ういふことを皆さんと共に結論したい。これによりまして初めて幼稚園といふものが國民教育上の位置に於て確認された、斯う言ひたい。

今までと雖もお互ひはその心算でありました。幼稚園令もその心を元より持つて居りました。持つて居りましたが、家庭教育を補つて學齡前教育を學齡前教育として完成しようといふ考へ方が主であつたといふ趣きも見られます。國民教育といふものに於て就學前から調子に合せて、その施設たる幼稚園を改造充實せしめなければいかんといふ言葉に於て初めて幼稚園が國民教育に於て缺くべからざる位置を持つものだといふことが言はれる。斯う理解したいのであります。

大正十五年に幼稚園令が出来ましたことは我國教育制度の中に、教育系統の中に幼稚園が入つたといふことに於きまして實に大事なものであります。けれ共、まだその時は今の意識から申しますと、學齡前のごきは顧みざる風がないでもない、ところが今度は學齡前を顧みざるべからずでなく、國民育成のために缺くべからざるごきだ、斯うなつたのであります。これは幼稚園の國民教育上の位置の確立を申していいのであります。

いろいろの條件に於きまして、豫て國民教育そのものでありました國民學校のやうな形に、來年、再來年から實施せら

れるかさうか、それは私は知りません。そんなに教育審議會が答申して居るならば直ぐ義務教育にすべきではないかといふ熱心家のお説に私は賛成する。しかしそれが實現するか、しないかは暫く問題外に致しまして、日本の幼稚園に對する觀念は斯ういふ形になつたのだといふことははつきりさせて置いて戴きたいと思ひます。

國民教育といふ大きな問題の中に幼稚園の位置が確立したとき、それを小さく言ひますならば、今までの小學校と幼稚園との關係のやうな推移的な關係、偶然的な關係であつたものが、今度は實に必須なる關係になつて來る言ひ得るのであります。之れ迄は、學齡前は學齡前で幼稚園法則によつてやつて置けよ、保育は教育にあらず、幼稚園から來ようが來まいが、小學校は小學校の教育である言つて居りました。その聯絡を圖らうといふので頻りに苦心致したのが從來であります。それが今日は小學校へ行つて本當の國民教育を國民學校に於て受けるためには、就學前の幼兒期が國民教育の下の培ひとして出來て居なければならぬといふことを言はれて居るのであります。

これは大きな實際問題であり、況して昨日今日それもなく申しました如く、今度の國民學校に於て採用されまところの教育方法の特質が何んぞ幼稚園保育の特質と非常に近づいて參つたのでありますから、そつちからも非常に密接になつて來たといふことが言へるのであります。

私は昨日と今日のお話を、この最後の數分申上げましたことに歸着せしめるために申上げました。即ち我々は今幼稚園が直ぐに法令上さうなるかは暫くお預りさしませんが、從來國家が幼稚園を見て居り、従つて國民教育の本體である國民學校との關係に於て、今までのやうな状態とは全く違ひまして、こゝで國民教育の實質的系統の中に幼稚園が入つて來、教育方法上の聯關に於ても極めて滑かなものになつて來たのであるといふことをはつきり知りたいのであります。この意味に於きまして、私は假に國民幼稚園といふ名前を皆さんと共に謳つてみたいと思ふのが今回の講習會の要點であります。國民幼稚園といふ言葉はきまつた言葉ではございませぬ。しかしそれは私達の心持ちを最もよく、あらはしてゐる一つの詩の言葉として謳ひたいと思ふのであります。

倉橋惣三著  
育ての心

定價 送料

東京、神田區駿河臺三丁目六  
刀江書院

倉橋惣三著

幼稚園保育法眞諦  
二、八〇〇、一六

東京、神田區神保町一丁目六七  
東洋圖書株式會社

倉橋惣三共著  
新庄よしこ著

日本幼稚園史  
三、八〇〇、二〇

同上

倉橋惣三著

幼稚園雜草  
二、五〇〇、一四

東京、日本橋區、大傳馬町  
内田老鶴圃

日本幼稚園協會編

幼兒に聽かせるお話  
三、八〇〇、一四

同上

日本幼稚園協會編

幼兒の樂しむお話  
二、八〇〇、一四

同上

日本幼稚園協會編  
幼兒發達検査

東京、神田、神保町  
フレイベル館

淡路圓次郎著

幼兒性行評定尺度  
一、〇〇〇、二

同上

倉橋惣三監修  
保育叢書

菊池ふじの著  
徳久孝子著

幼兒のための  
人形芝居脚本  
一、〇〇〇、二

同上

及川ふみ著

幼稚園の手技製作  
一、〇〇〇、二

同上

膳眞規子著

自然物おもちゃ  
一、〇〇〇、二

同上

和田實著

實驗保育學  
一、〇〇〇、二

同上

日本幼稚園協會編輯 幼兒の教育

會長 東京女子高等師範學校長  
 主幹 東京女子高等師範學校教授  
 附屬幼稚園主事  
 下村壽一  
 倉橋惣三

日本幼稚園協會規則

第一條 本會ハ幼兒教育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス  
 第二條 本會ハ日本幼稚園協會ト稱ス  
 第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒教育ニ篤志ナルモノトス  
 第四條 會員ハ會費トシテ一ヶ月金參拾五錢ヲ齎出スヘシ、會員ハ無料ニテ本會發行雜誌ノ配布ヲ受ケ又本會ノ事業ニ關シ諸種ノ便宜ヲ受ケ  
 第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルトキハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルヘシ  
 第六條 幼稚園ニ關係アルモノニシテ本會ノ事業ノ爲ニ特ニ盡力ヲ與ヘラル、モノニ請ヒテ地方委員トナスコトアルヘシ  
 第七條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク。但場合ニヨリ臨時休會スルコトヲ得  
 第八條 本會ハ左ノ事業ヲ行フ  
 一、幼兒教育ニ關スル研究及ヒ調査  
 一、幼兒教育ニ關スル講演會及ヒ講習

會ノ開催  
 一、雜誌發行(毎月一回)  
 一、幼兒教育ニ關スル圖書刊行  
 一、保姆就職及招聘ニ關スル仲介  
 一、其他本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件  
 第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク  
 會長 一名 會務ヲ總理ス  
 主幹 一名 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス  
 幹事 若干名 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス  
 評議員 若干名 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ス  
 第十條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス  
 第十一條 主幹 幹事 評議員ハ二ヶ年ヲ期シテ會長ヨリ推舉スルモノトス  
 第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルヘシ  
 第十三條 本規則ハ總會出席會員ノ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ變更スルコトヲ得ス

定規文注

發行所 日本幼稚園協會  
 振替口座東京一七二六六番  
 東京市小石川區大塚町三十五  
 東京女子高等師範學校附屬幼稚園内  
 一、本誌御注文の方は凡て前金(郵税共之)で願ひます。(郵券代用の場合は換へて御座います)  
 一、御送金の場合にはなるべく振替貯金で振替口座東京一七二六六番日本幼稚園協會宛に願ひます。  
 一、送金の節には第何巻第何月號より第何月號迄と明記せられたし。  
 一、本誌の代金に對しては別に領收證を差出しません。特に御入用の方は往復はがきで御申越を願ひます。  
 一、會費切又は前金切の際にはその最終發送の雜誌の帶封に「前金切」の印章を押捺いたしますから本誌の見本御入用の場合には前金參拾五錢發送を願ひます。

不許複製 禁止轉載

編輯者 倉橋惣三  
 印刷者 柴山則常  
 印刷所 東京市本郷區駒込林町百七十二番地  
 杏林舎

昭和十五年九月二十八日印刷納本  
 昭和十五年十一月一日發行  
 外國行郵税は一部金拾貳錢の割にて御拂込下さい。  
 幼兒の教育 第四十卷 第十號

定價

一ヶ月分	冊送金參拾五錢	特等面一頁	二等面一頁
六ヶ月分	冊送金貳圓拾錢	一等面一頁	以下
一年分	冊送金四圓拾錢	金拾五圓	御斷り
拾貳冊送金	共	神田區駿河臺一丁目三品田	廣告社に御申込下さい





# 目書行發館ルベーフ

## 保 育 叢 書

倉橋惣三先生監修

四六判綿布本  
各册定價金一  
送料六錢圓

第一編 幼兒の 人形芝居 脚本

菊地ふじの先生共著  
徳久 孝子先生著

第二編 自然物 おもちや

勝 眞規子先生著

第三編 幼稚園の 手技製作

及川ふみ先生著

第四編 實 験 保 育 學

和田 實先生著

幼兒性行評定尺度

淡路圓治郎先生著

定價 金 一  
送料 六 錢圓

幼兒發達検査

淡路圓治郎先生  
牛島義友先生共著  
吉田 虎彦先生

定價 金 一  
送料 六 錢圓

農繁託兒所の經營

倉橋惣三先生共著  
緋田 工先生著

定價 金 廿  
送料 三 錢

實地踏査に基づく フレーベル全傳

高市 慶雄先生著

定價 金 一圓五十錢  
送料 六 錢

幼稚園律動遊戲曲譜集

大阪市保育會編

全 定價 金 二  
圓册

附 記憶感覺競争遊戲・動作篇

構成々分ぎ 幼稚園遊戲の保育要諦  
主としたる

大阪市幼稚園共同研究會第六區編

第一卷 動作集 (金三圓)・第二卷 曲譜集 (金二圓)

子 供 の 舞 踊

石井 漠先生著

定價 金 二圓五十錢  
送料 十 錢

シルエツトの作り方

鈴木 重章先生著

定價 金 一  
送料 六 錢圓

# 食館ルベーフ 社會式株

本社 東京 神田 二町保神 (33) 電話 六六二番  
支店 大阪 區東 五町後備 (24) 電話 八三二番

昭和十五年五月十五日第三種郵便物認可  
昭和十五年九月二十八日印刷納本  
昭和十五年十月一日發行

定價參拾五錢